

第 2 次山陽小野田市食育推進計画中間評価報告
(食育に関する市民意識調査)

令和 4 年 1 0 月
山陽小野田市健康増進課

食育に関する市民意識調査結果

1. 調査目的

山陽小野田市食育推進計画の推進にあたり、市民の食生活や食育に対する現状を把握し、また、数値目標の達成状況を確認することで計画の中間評価を行い、計画の見直しを図るために調査を実施する。

2. 調査期間

令和3年11月15日（月）～令和3年12月15日（水）1か月間

3. 調査対象

①子ども向け調査

市内在住の小学5年生 中学2年生

②成人向け調査

市内在住の20代以上の人

4. 調査方法

①子ども 学校へ依頼し、学校にて調査実施後、回収を依頼する

②成人 対象年齢に該当する人へ配布、回収を依頼する

依頼先	20代、30代	大学・幼稚園・保育園・企業等
	40代、50代	企業等
	60代以上	地区組織等

5. 調査配布数

①子ども 小学5年生(538人)、中学2年生(537人) 合計1,075人

②成人 1,711人

6. 回収数（回収率）

①子ども 小学5年生517人(回収率96.1%)

中学2年生494人(回収率92.0%)

②成人 1,508人 (回収率88.2%)

7. その他

※平成29年度に実施した「食育に関する市民意識調査」を基礎調査としている

※分析の結果、優位差が認められたものについて、「増加」・「減少」等としている

子ども属性

【小中学校割合】

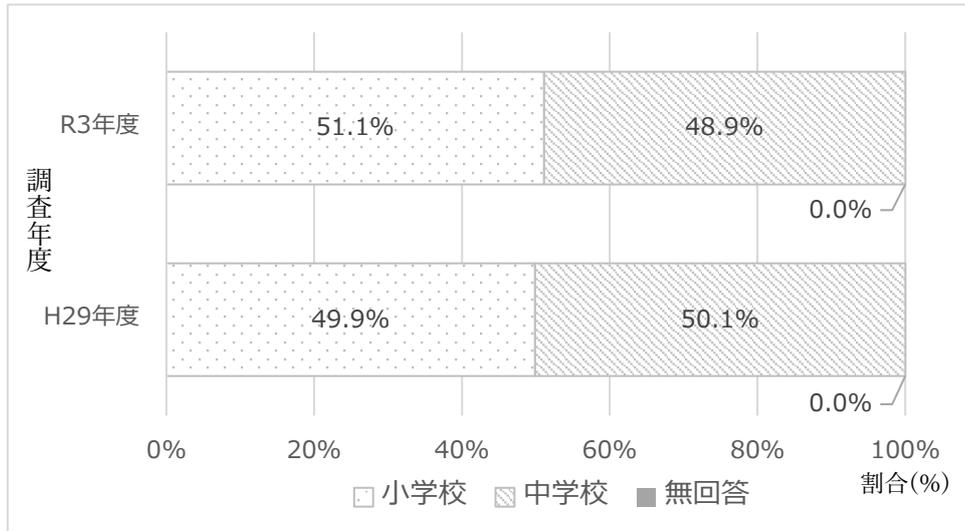


図1 回答者の年齢割合 (R3 n=1011, H29 n=1000)

【性別】

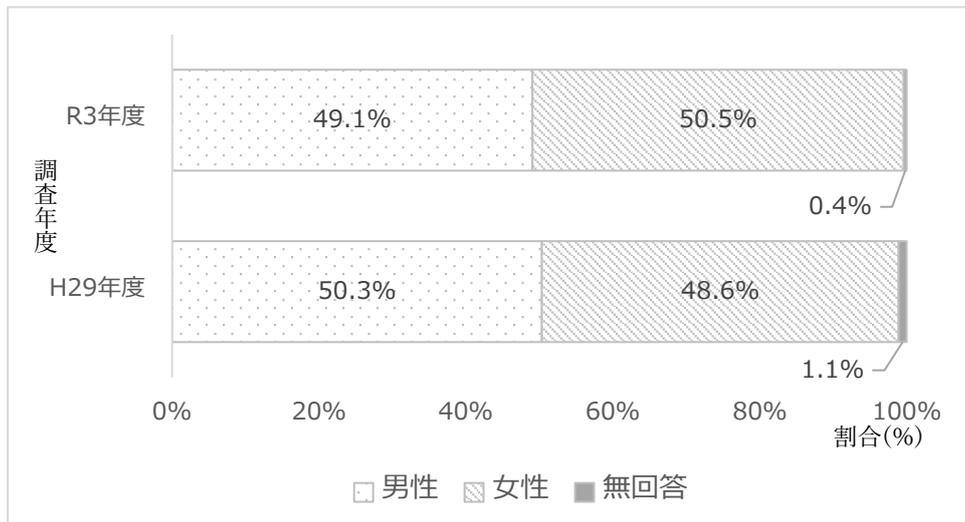


図2 回答者の性別割合 (R3 n=1011, H29 n=1000)

成人属性

【年齢】

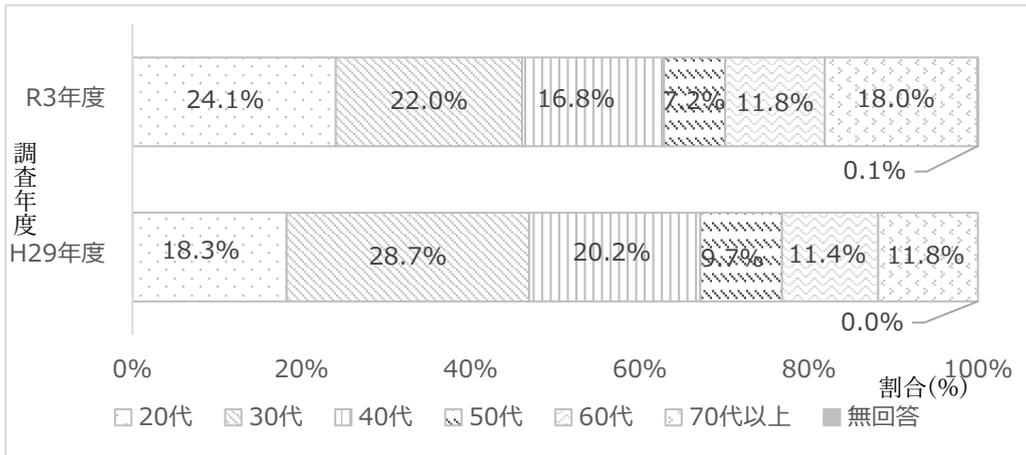


図3 回答者の年齢割合 (R3 n=1508, H29 n=1315)

【性別】

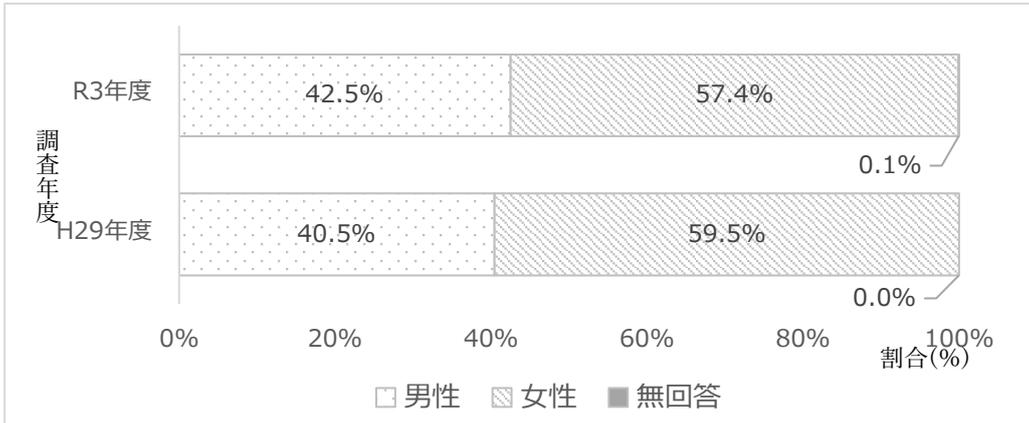


図4 回答者の性別割合 (R3 n=1508, H29 n=1315)

【家族構成】

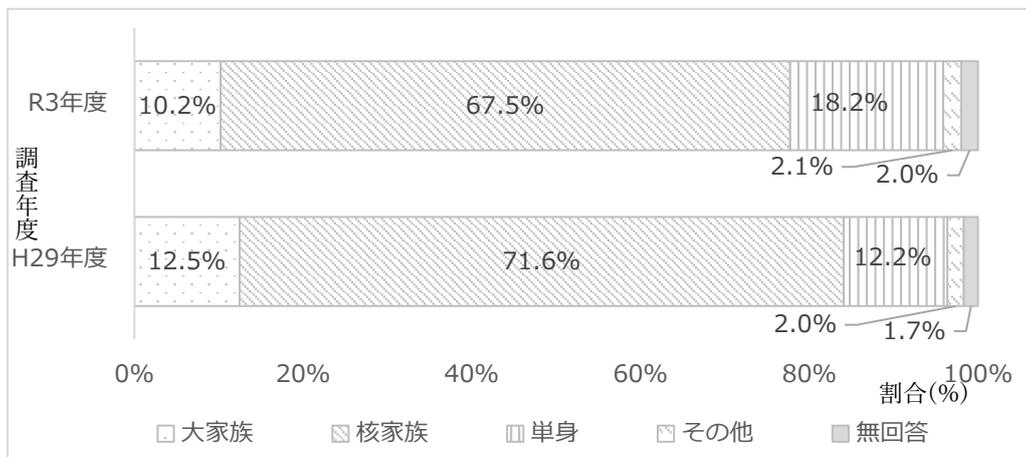


図5 回答者の家族構成割合 (R3 n=1508, H29 n=1315)

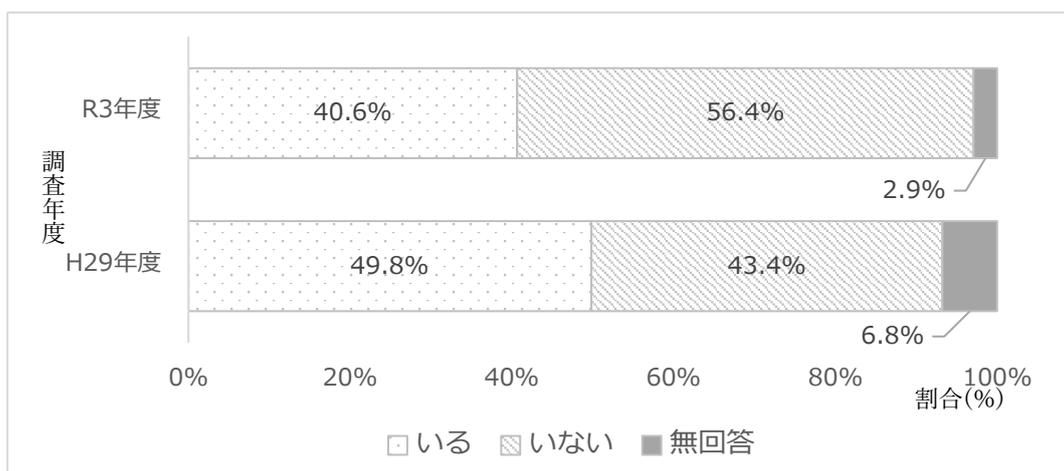


図6 回答者の世帯に18歳未満の子どものいる割合 (R3 n=1508, H29 n=1315)

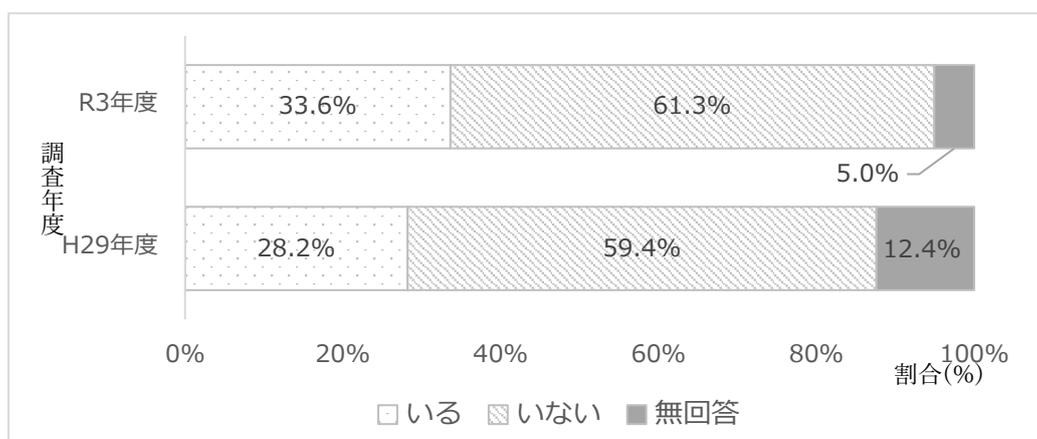


図7 回答者の世帯に65歳以上の高齢者のいる割合 (R3 n=1508, H29 n=1315)

【校区】

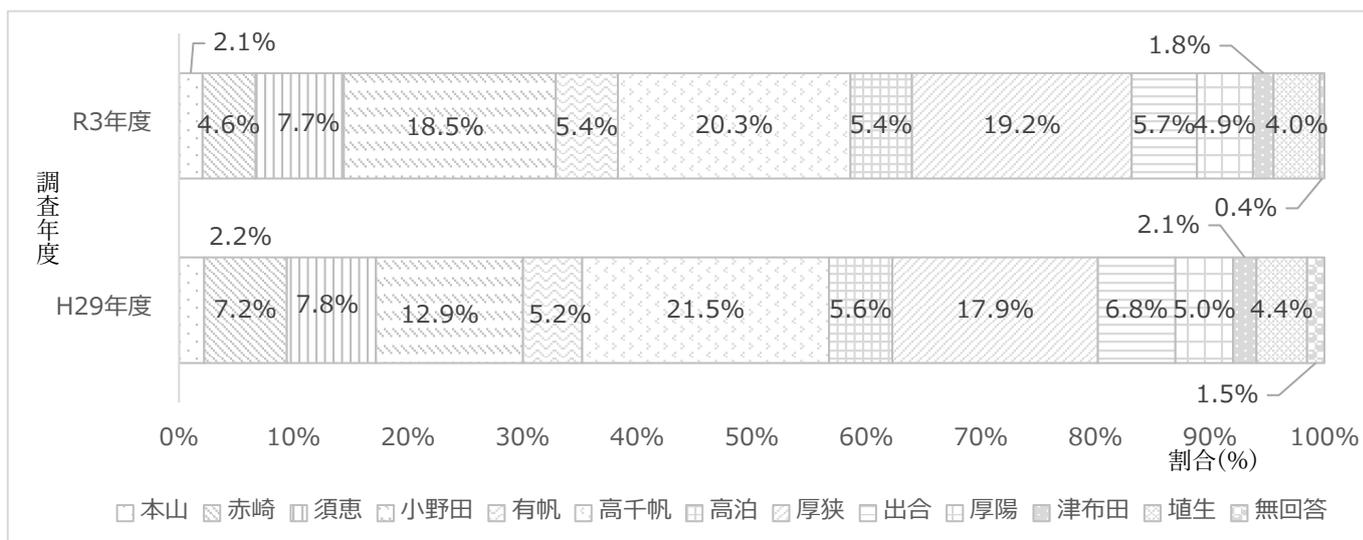


図8 回答者の居住する小学校区の割合 (R3 n=1508, H29 n=1315)

【食育への関心について】

「食育」という言葉を聞いたことがありますか？（成人）

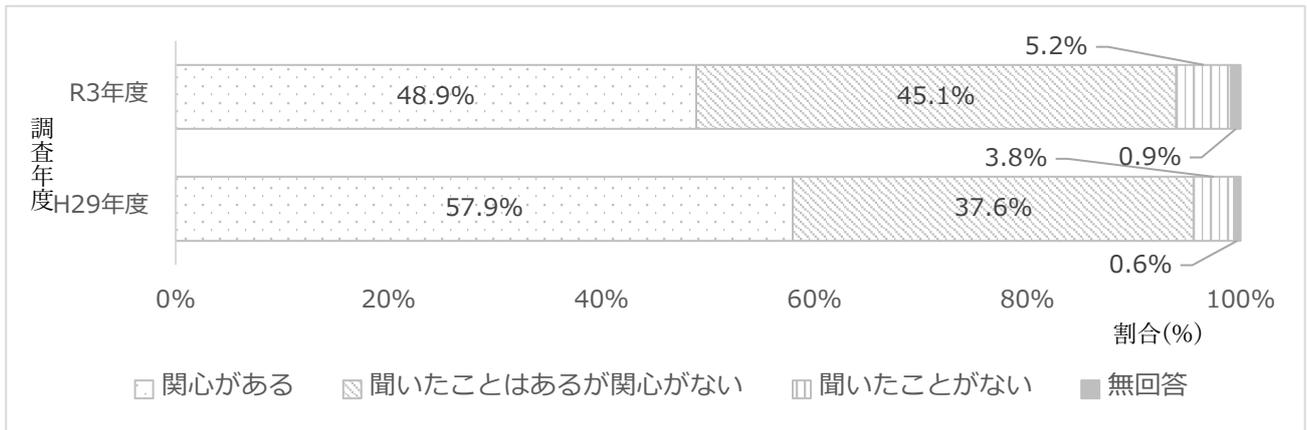


図9 食育に関する関心 (R3 n=1508, H29 n=1315)

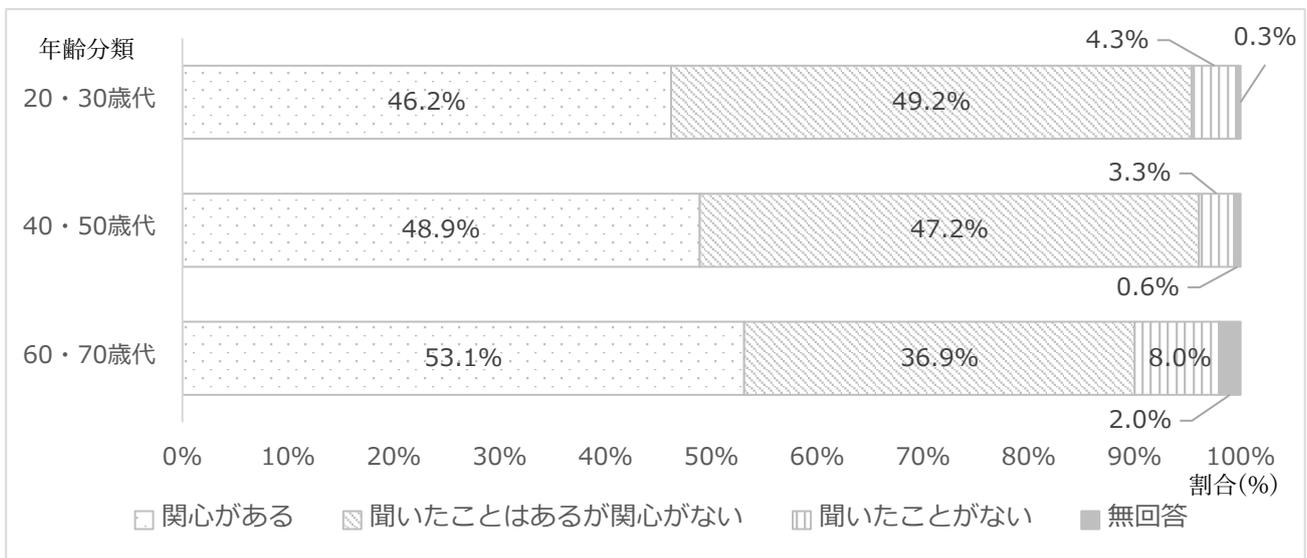


図10 食育に関する関心（年代別）

(20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

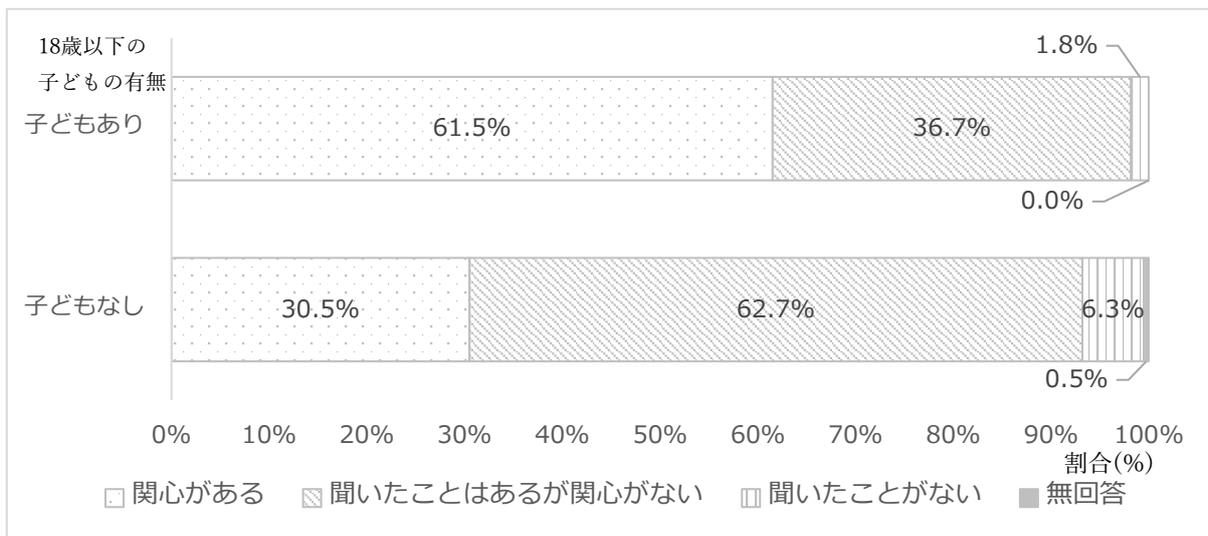


図11 食育に関する関心（子どもの有無）

(子どもあり n=545、子どもなし n=397、分析対象は20・30・40歳代のみ)

「食」のどの分野に関心がありますか？（成人）

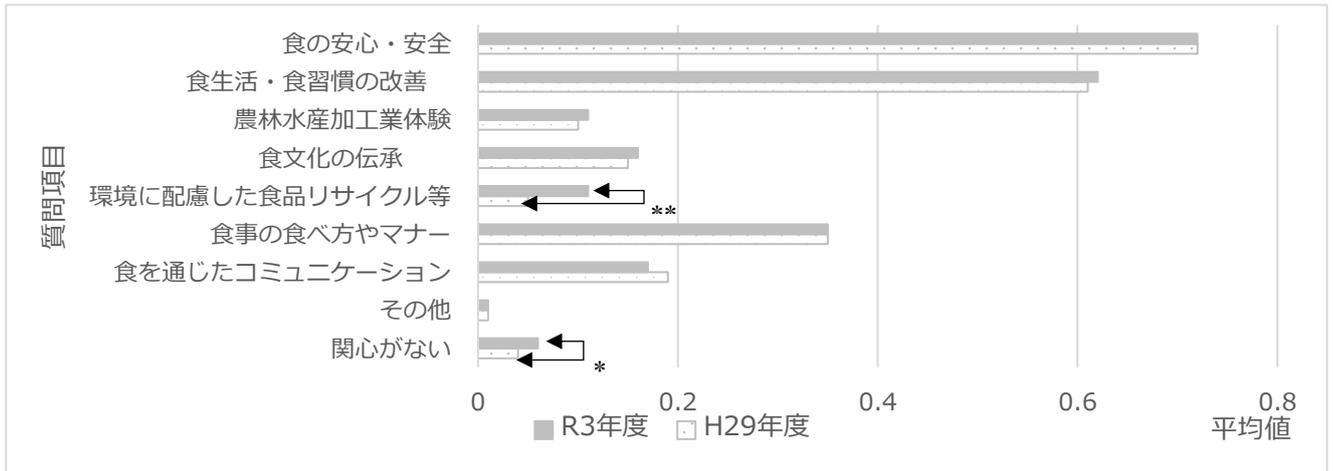


図12 食育に関する関心のある分野 (R3 n=1508, H29 n=1315)

「食」に関する情報をどこから得ていますか？（成人）

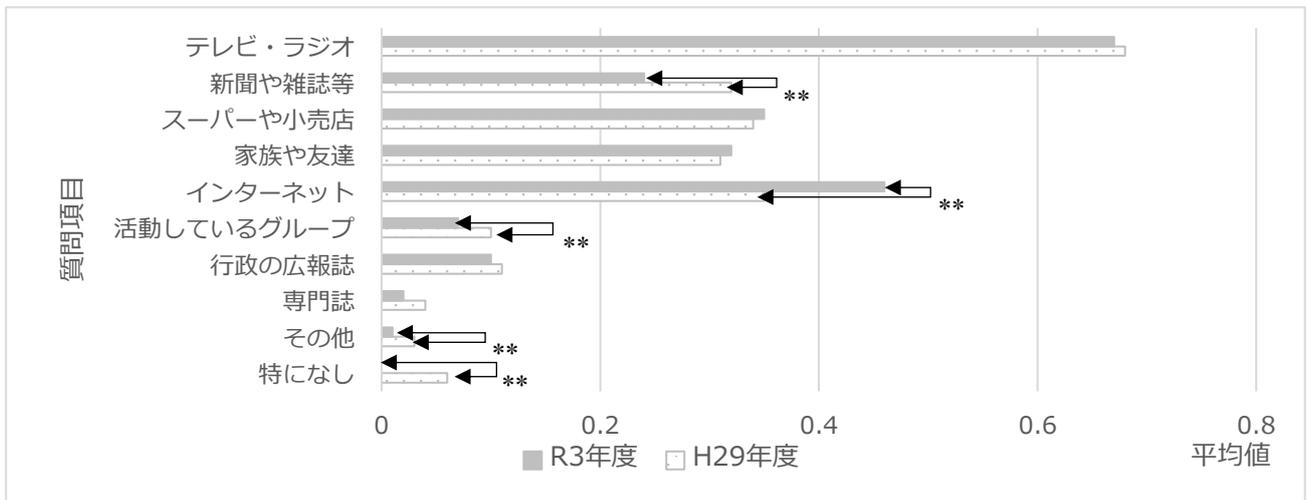


図13 食に関する情報源 (R3 n=1508, H29 n=1315)

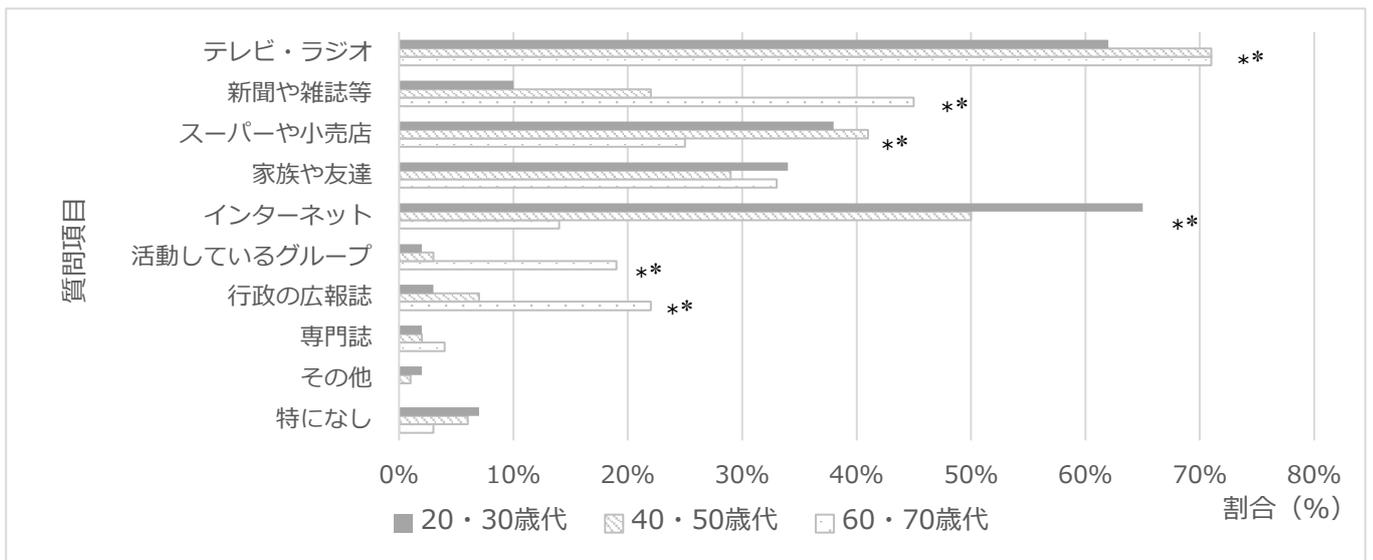


図14 食に関する情報源 (20・30歳代 n=688, 40・50歳代 n=362, 60・70歳代 n=441)

図12、13、14の「*」、「**」は、H29年度とR3年度を比較した結果、有意差が認められたもの。
 .（「*」より「**」の方がより有意差が大きい t検定で ** : p<0.01, * : p<0.05）

<結果まとめ>

基礎調査と比較して、「関心がある」割合が 57.9%から 48.9%に減少し、「関心がない」の割合が 37.6%から 45.1%に増加した。(図 9) また、年代別に比較すると、「関心がある」割合は、20・30 歳代は 46.2%、45・50 歳代は 48.9%、60・70 歳代は 53.1%と若い世代ほど低かった。(図 10) 18 歳以下の子どもの有無で比較すると、子どもありは、「関心がある」割合は 61.5%、子どもなしは、30.5%だった。(図 11)

食の関心がある分野については、「食の安心・安全」が最も多く、次に「食生活・食習慣の改善」、次に「食事の食べ方やマナー」という順に多かった。また、分野ごとに基礎調査と比較すると「環境に配慮した食品サイクル」に関心がある人、「関心がない」と答えた人に有意差に増加した。(図 12)

情報源については、「テレビ・ラジオ」が最も多く、次に、「インターネット」、「スーパーや小売店」、「家族や友達」の順に多かった。また、情報源ごとに基礎調査と比較すると、「インターネット」が増加し、「新聞や雑誌等」、「活動しているグループ」が有意に減少した。(図 13) 年代別に比較すると、20・30 歳代は、「インターネット」がもっと多く、次に「テレビ・ラジオ」、「スーパーや小売店」が多かった。40・50 歳代は、「テレビ・ラジオ」が最も多く、次に「インターネット」、「スーパーや小売店」が多かった。60・70 歳代は、「テレビ・ラジオ」が最も多く、次に「新聞や雑誌等」、「家族や友達」が多く、他の年代と比較すると、「活動しているグループ」や「行政の広報誌」と答える割合が多かった。(図 14)

<対策>

「食」への関心については、若い世代ほど、また、子どもなしの方がありに比べて「関心がある」割合が低かったことから、若い世代で、子どもなしの単身者や学生への啓発の強化が必要と考える。

「食」の関心がある分野で最も多かった「食の安心・安全」を切り口として、興味、関心をもってもらえることから食育の啓発を行うようなアプローチの工夫が必要と考える。

また、「テレビ・ラジオ」に次いで「インターネット」、「スーパーや小売店」から情報を得る人が多かったことから、対象者(世代)に合せた SNS の積極的な活用、「スーパーや小売店」との連携も必要と考える。

【共食について】

地域にいる様々な人が集える共食の場（自治会や子ども会などの会食の場）に参加したことがありますか？（成人）

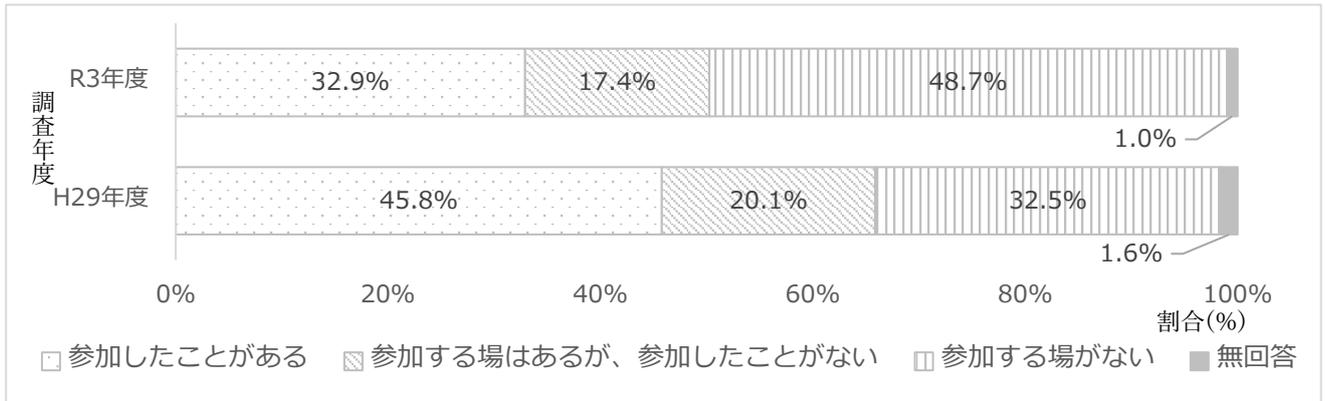


図15 共食の場への参加（R3 n=1508, H29 n=1315）

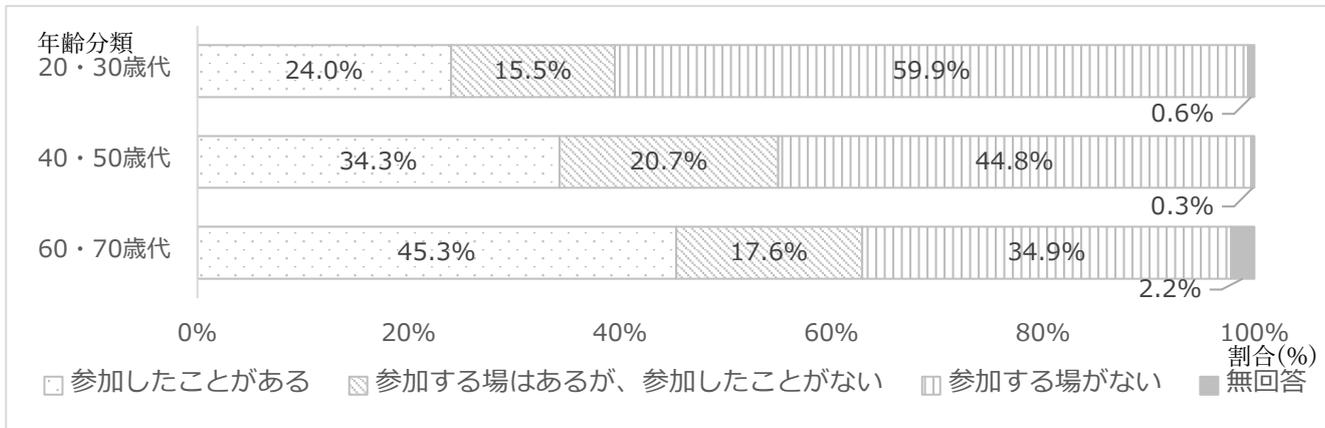


図16 共食の場への参加（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

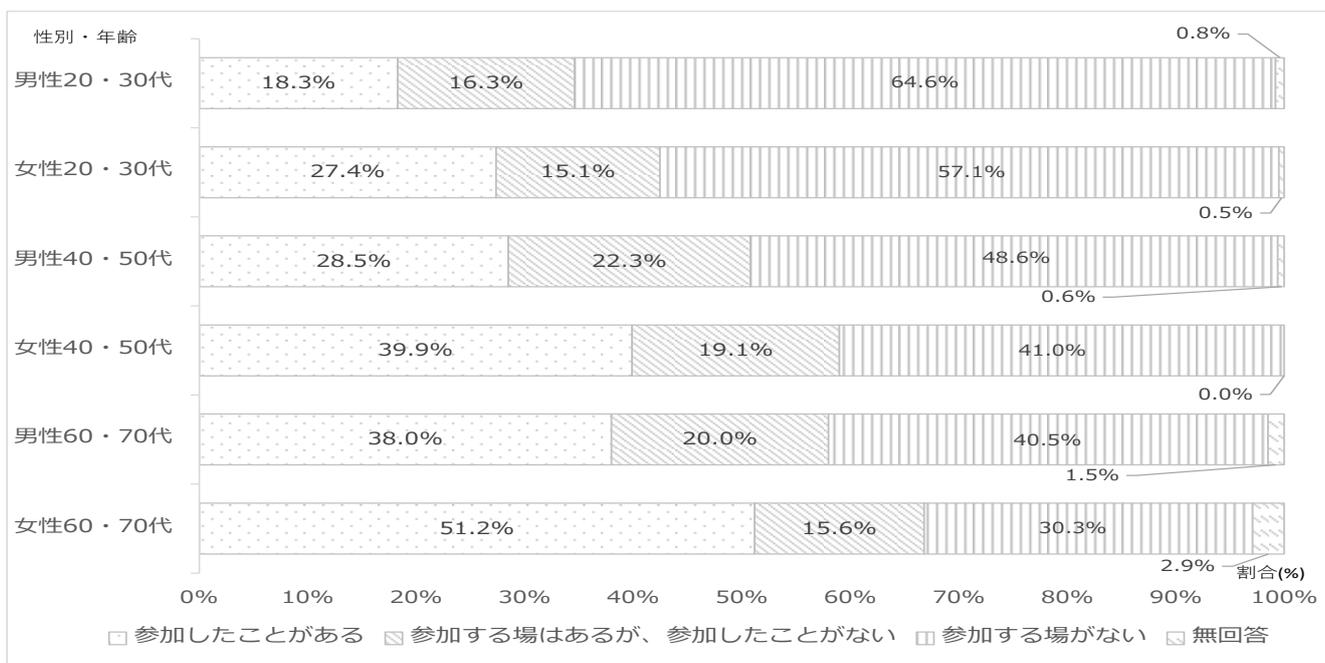


図17 共食の場への参加経験に関する回答（20・30歳代男性 n=257、20・30歳代女性 n=438、40・50歳代男性 n=179、40・50歳代女性 n=183、60歳以上男性 n=205、60歳以上女性 n=244）

孤食をしている子ども、一人暮らしの若い世代や高齢者など、地域にいる様々な人が集える共食の場があれば参加したいと思いますか？（成人）

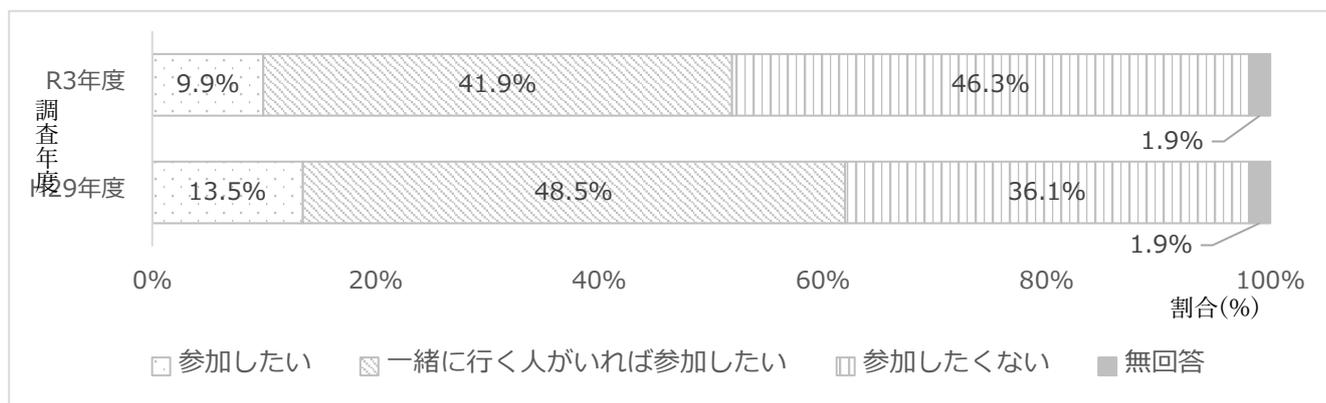


図 18 共食の場への参加 (R3 n=1508, H29 n=1315)

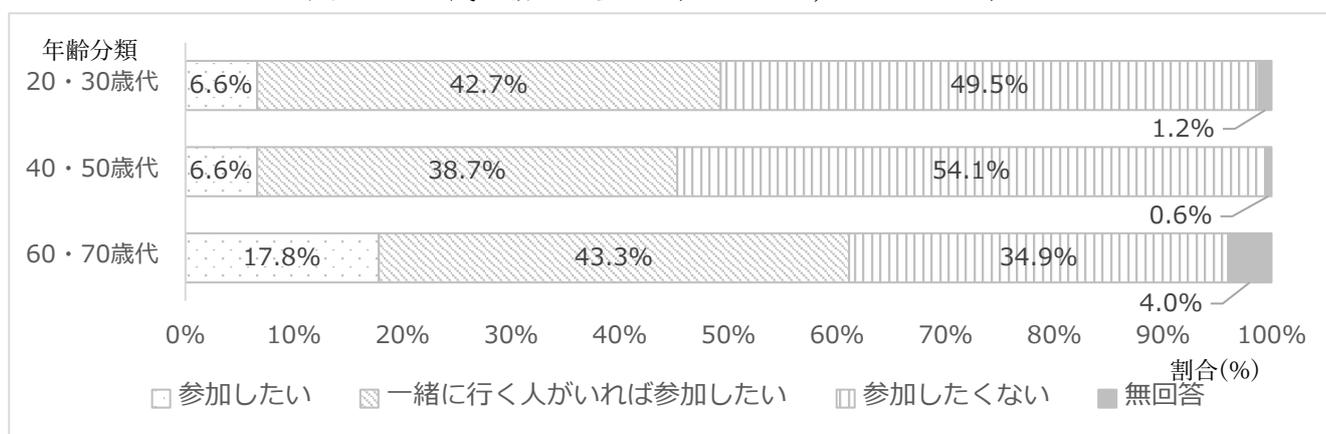


図 19 共食の場への参加 (20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

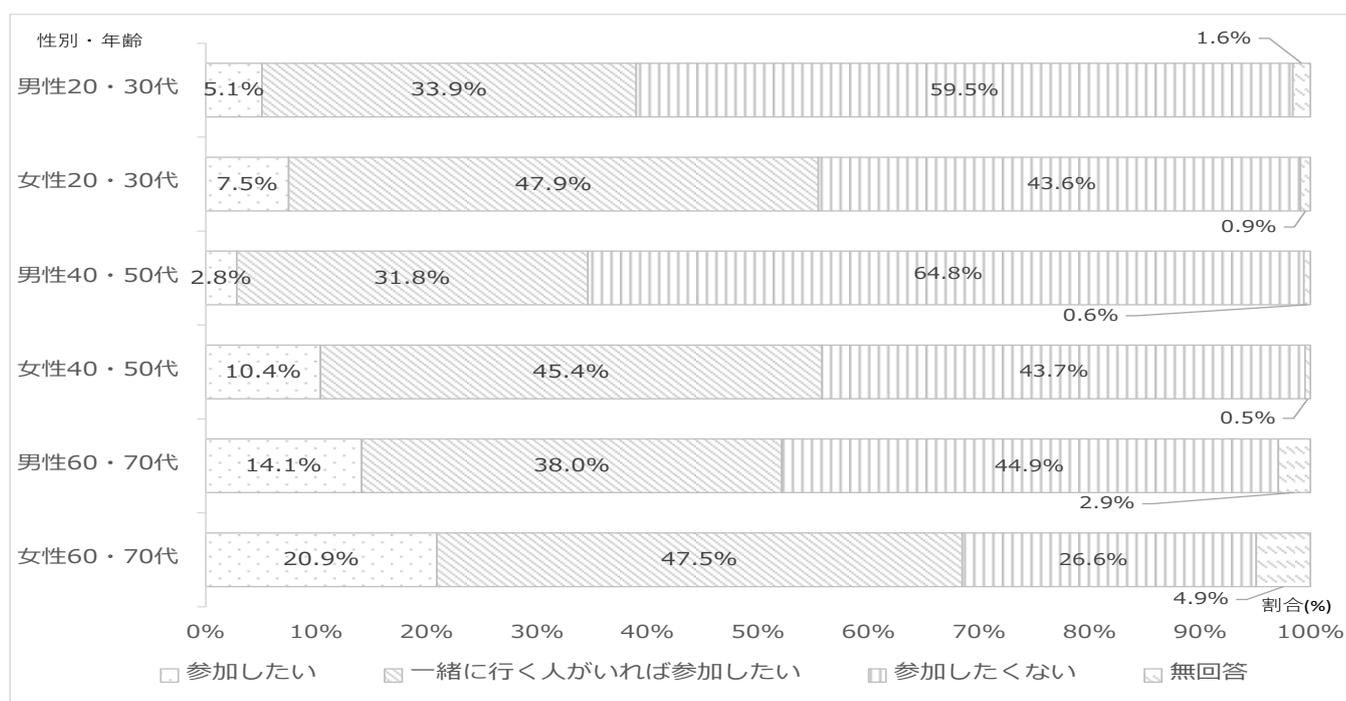


図 20 共食の場への参加意欲に関する回答 (20・30歳代男性 n=257、20・30歳代女性 n=438、40・50歳代男性 n=179、40・50歳代女性 n=183、60歳以上男性 n=205、60歳以上女性 n=244)

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、「共食の場に参加したことがある人」の割合が45.8%から32.9%に減少し、「参加する場がない人」の割合が32.5%から48.7%に増加した。(図15) また、年代別で比較すると、「参加したことがある」割合が、20・30歳代は24.0%、40・50歳代は34.3%、60・70歳代は45.3%と若い世代ほど低かった。(図16) さらに、性別で比較すると、20・30歳代は男性18.3%、女性27.4%、40・50歳代は、男性28.5%、女性39.9%、60・70歳代は男性38.0%、女性51.2%とすべての年代で女性より男性の方が低かった。(図17)

また、基礎調査と比較して、共食の場に「参加したい」、「一緒に行く人がいれば参加したい」と答えた人の割合を合計すると、62.0%から51.8%と減少した。(図18) また、年代別で比較すると、20・30歳代は49.3%、45・50歳代は45.3%、60・70歳代は61.1%だった。(図19) さらに、性別で比較すると、20・30歳代は男性39.0%、女性55.4%、40・50歳代は、男性34.6%、女性55.8%、60・70歳代は男性52.1%、女性68.4%と女性より男性の方が低かった。(図20)

<対策>

コロナ禍で、感染拡大のリスクの高いシチュエーションの1つにマスクを外した飲食の機会とされているため、感染への不安、地域での会食の機会の自粛、制限がされたことが、共食の機会の減少、共食の場に「参加したい」割合が減少した主な原因と考える。このことから、不安を解消できる会食のあり方、感染対策を周知する必要があると考える。

また、若い世代は、孤食になることで食事の簡素化にならないよう、まずは家庭や友人など身近な人との共食の機会をつくること、高齢者は、地域の人と食卓を囲むことで食生活改善や口腔機能の維持につながることを伝えるなど、共食の必要性を十分周知する必要があると考える。

【地産地消】について

山陽小野田市でつくられる食材・特産品を知っていますか？（成人）

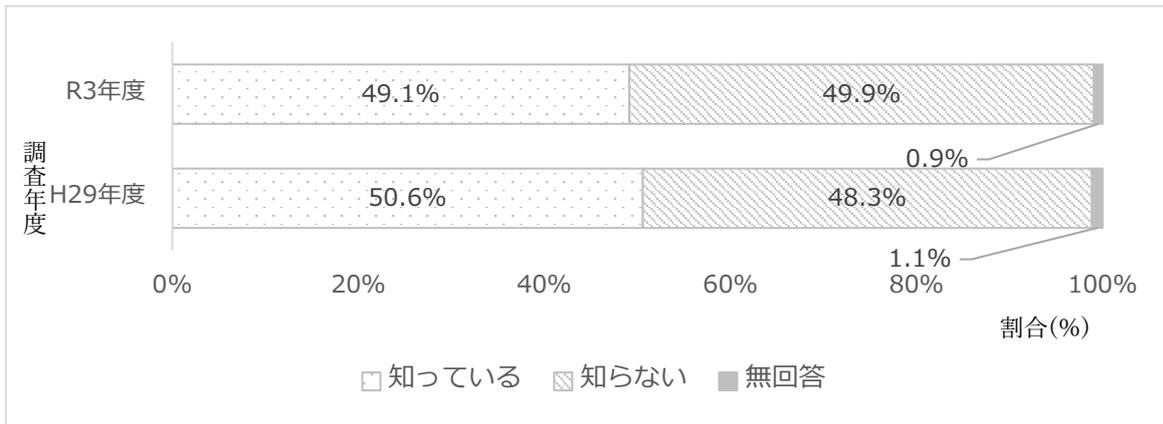


図 21 市の食材・特産品の認知 (R3 n=1508, H29 n=1315)

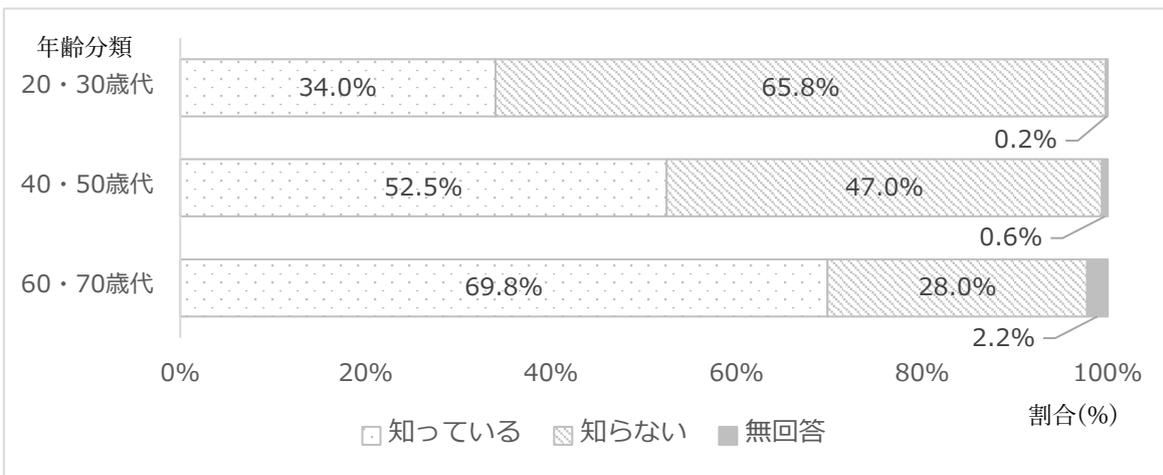


図 22 市の食材・特産品の認知 (年代別)

(20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

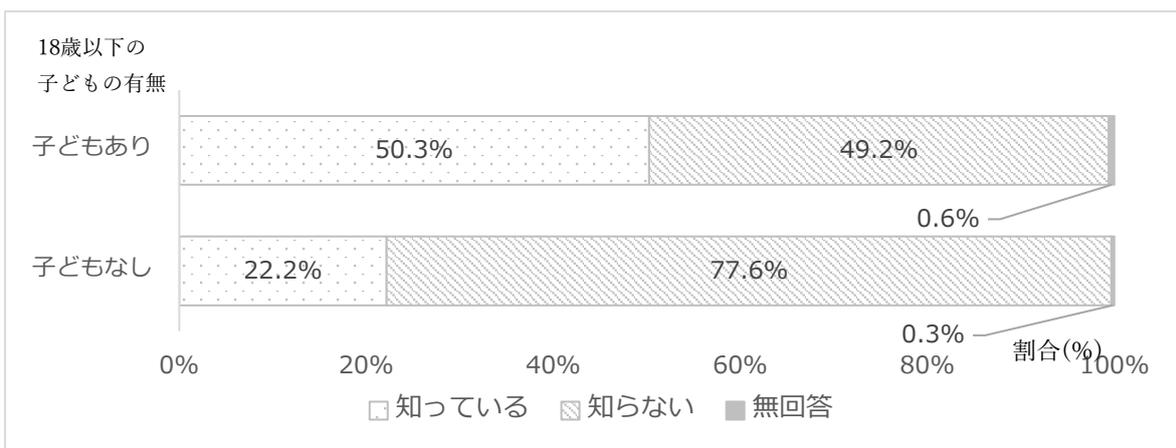


図 23 市の食材・特産品の認知 (子どもの有無)

(子どもあり n=545、子どもなし n=397、分析対象は20・30・40歳代のみ)

山陽小野田市でつくられる食材・特産品を知っていますか？（子ども）

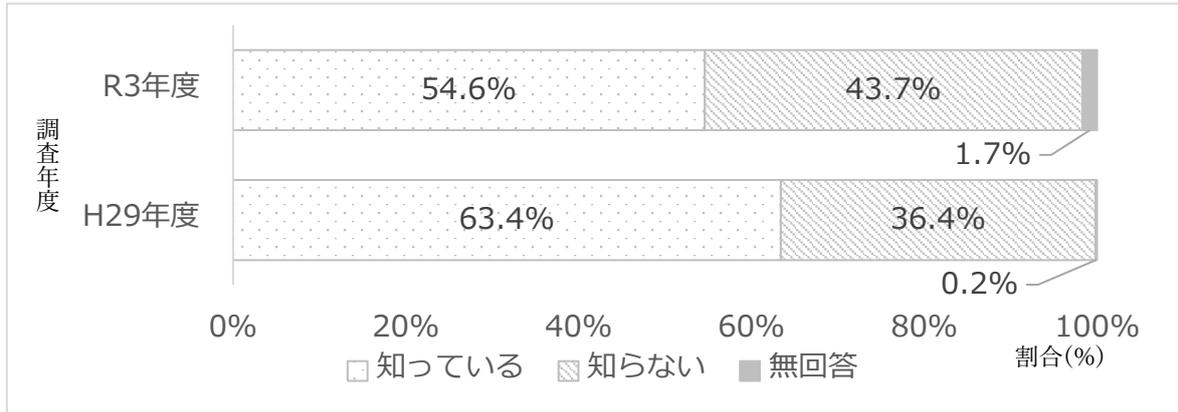


図 24 市の食材・特産品の認知度（小学校+中学校）（R3 n=1011, H29 n=1000）

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、「山陽小野田市でつくられる食材・特産品」の認知度について、成人は、有意差はなかったが、年代別で比較すると、「知っている」割合が、20・30歳代は34.0%、40・50歳代は52.5%、60・70歳代は69.8%と若い世代ほど低かった。（図 22）また、18歳以下の子どもの有無で比較すると、子どもありで「知っている」割合が50.3%、子どもなしが22.2%だった。（図 23）

また、子どもは、基礎調査と比較して「知っている」割合が、63.4%から54.6%に減少した。（図 24）

<対策>

「山陽小野田市でつくられる食材・特産品」の認知度が、若い世代ほど、また、子どもなしの方がありに比べて「知っている」割合が低かったことから、若い世代で、子どもなしの単身者や学生への啓発の強化が必要と考える。特に、若い世代へ地元の食材を身近に感じられるよう SNS の積極的な活用、スーパー等との連携により、販売コーナーでの「地産地消」に関する情報発信など、効果的な情報提供の場を検討が必要と考える。また、子どもの認知度も減少したことから学校との連携も強化する必要と考える。

【郷土料理・食文化】について

郷土料理（ぬた・ちしやなます・けんちょう・そうめん瓜なますなど）を知っていますか？（成人）

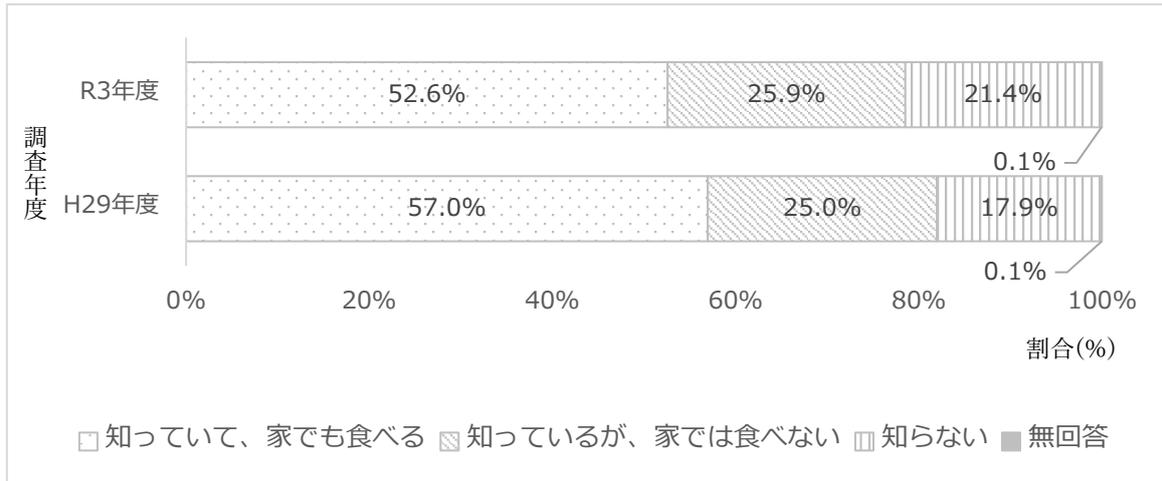


図 25 地元の料理の認知（R3 n=1508, H29 n=1315）

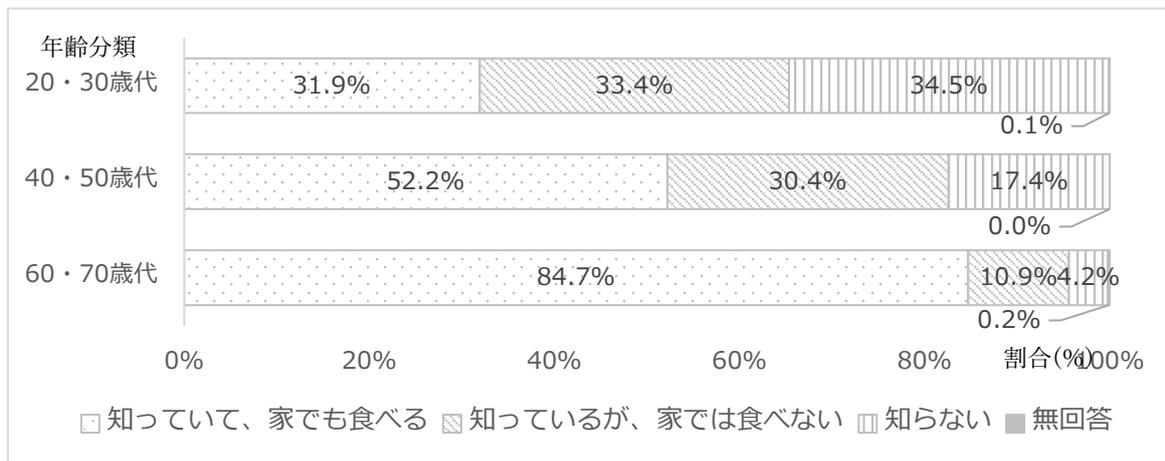


図 26 地元の料理の認知（年代別）

（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

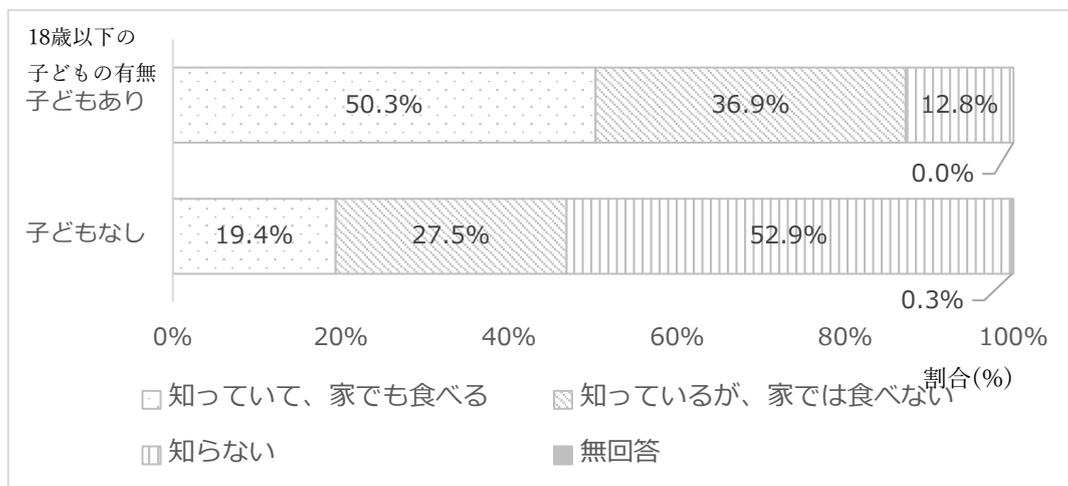


図 27 地元の料理の認知（子どもの有無）

（子どもあり n=545、子どもなし n=397、分析対象は20・30・40歳代のみ）

家庭で行事食を食べていますか？（成人）

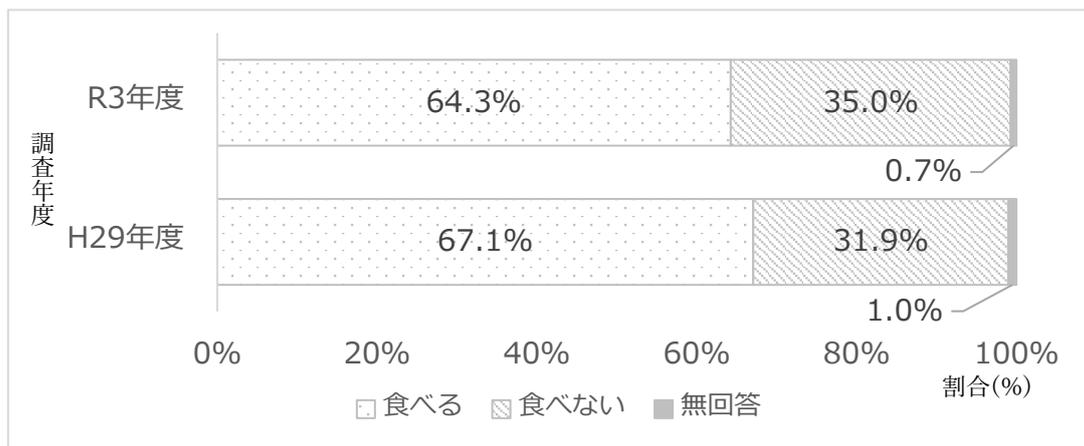


図28 家庭での行事食 (R3 n=1508, H29 n=1315)

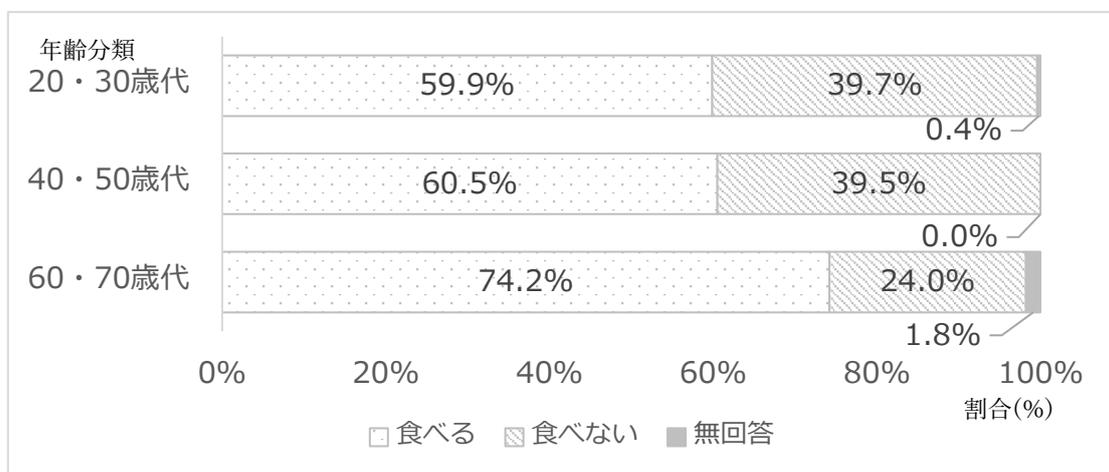


図29 家庭での行事食 (20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

家庭で行事食を食べていますか？（子ども）

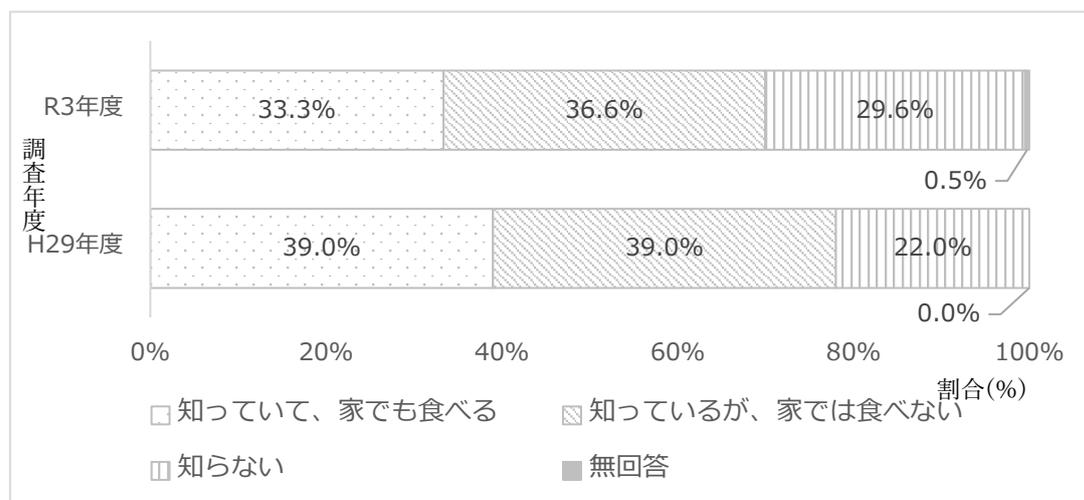


図30 地元で伝わる料理の認知度（小学校+中学校）(R3 n=1011, H29 n=1000)

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、有意差はなかったが、年代別で比較すると、郷土料理を「知っていて、家でも食べる」割合が、20・30歳代31.9%、40・50歳代は52.2%、60・70歳代は84.7%だった。(図26)

18歳以下の子どもの有無で比較すると、子どもありで「知っていて、家でも食べる」割合が50.3%、子どもなしが19.4%だった。(図27)

また、行事食は、基礎調査と比較して、有意差はなかったが、年代別で比較すると、「家でも食べる」割合が、20・30歳代は59.9%、40・50歳代60.5%、60歳70歳代は、74.2%だった。(図29) 子どもは、「家でも食べる」割合が、39.0%から33.3%に減少した。(図30)

<対策>

60・70歳代と比較すると、20・30歳代、40・50歳代は、「知っていて、家でも食べる」割合は低いことから、郷土料理を食べる機会が少ないことが考えられるため、郷土料理を手軽に作れる料理レシピなど、地区組織の活用も含め60歳代以上の人から伝える仕組みを作ることも必要と考える。また、子どもへの伝承が難しくなる傾向がうかがえるため、行事食の由来を伝えることや学校の調理実習の機会を利用して児童・生徒が自分で作ることができるよう手軽にできる郷土料理レシピを紹介するなど、食文化を伝承する機会をつくる必要があると考える。

【朝食摂取】について

朝食を食べていますか？（成人）

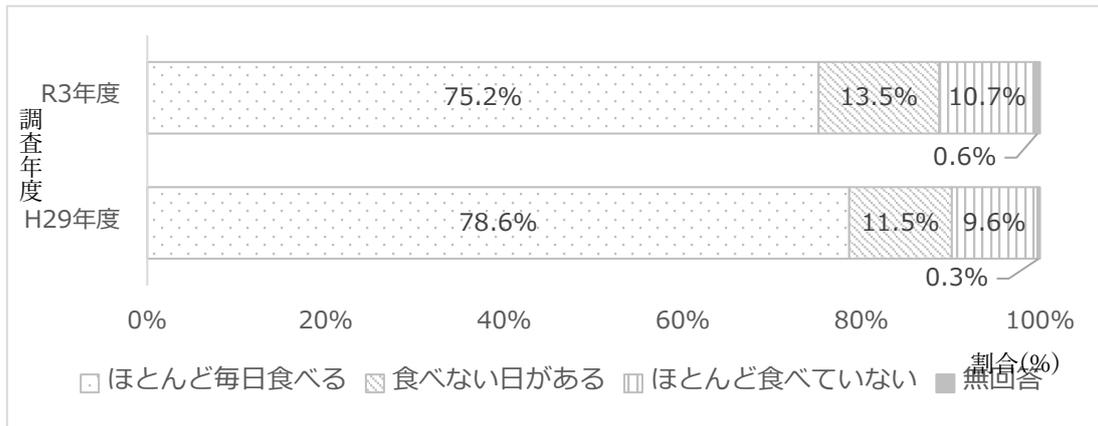


図 31 朝食を食べる頻度割合（R3 n=1508, H29 n=1315）

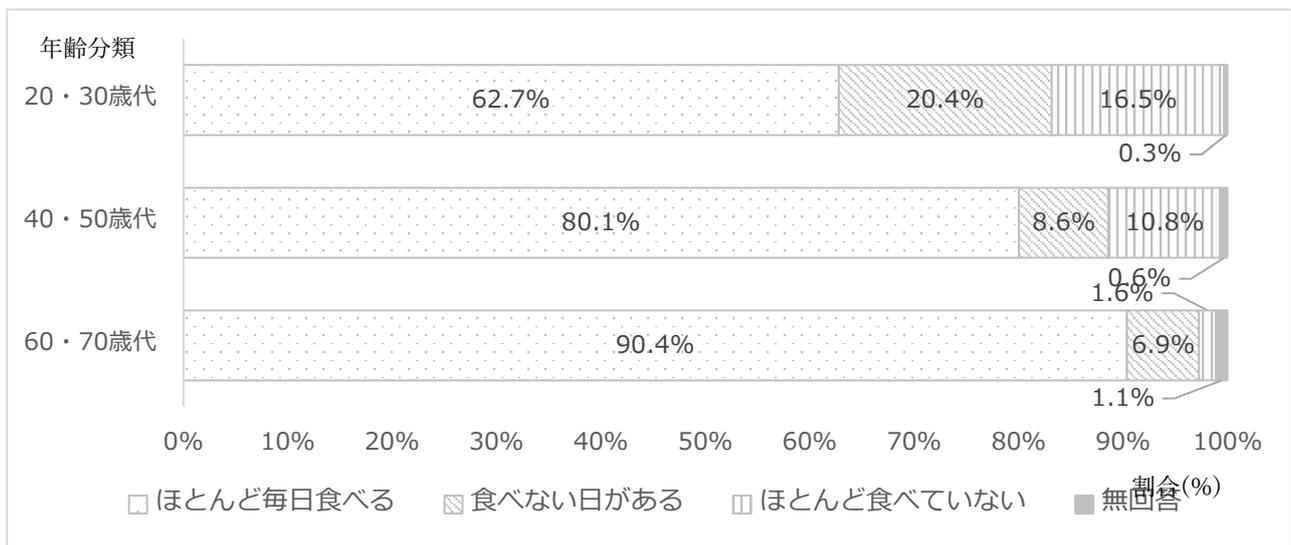


図 32 朝食を食べる頻度割合（年代別）

（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

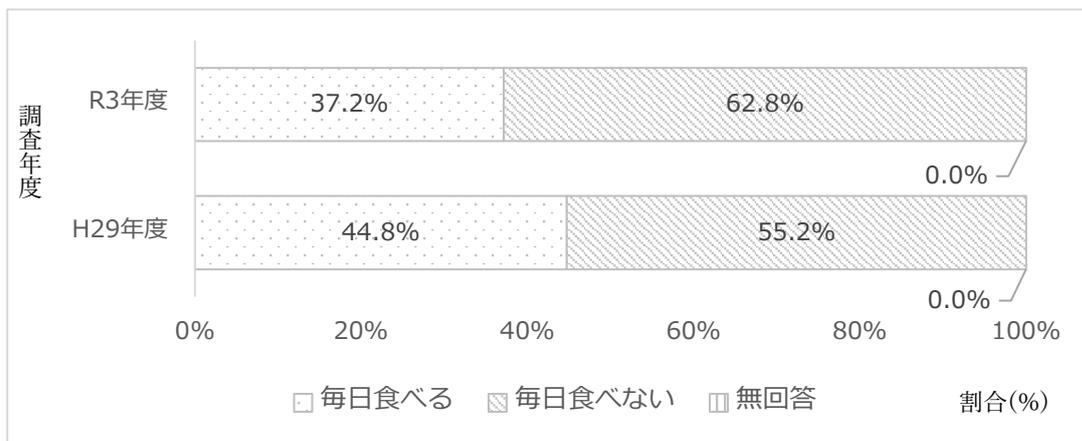


図 33 20代・男性の朝食摂取に関するクロス集計結果（平成 29 年度 n=143、令和 3 年度 n=183）

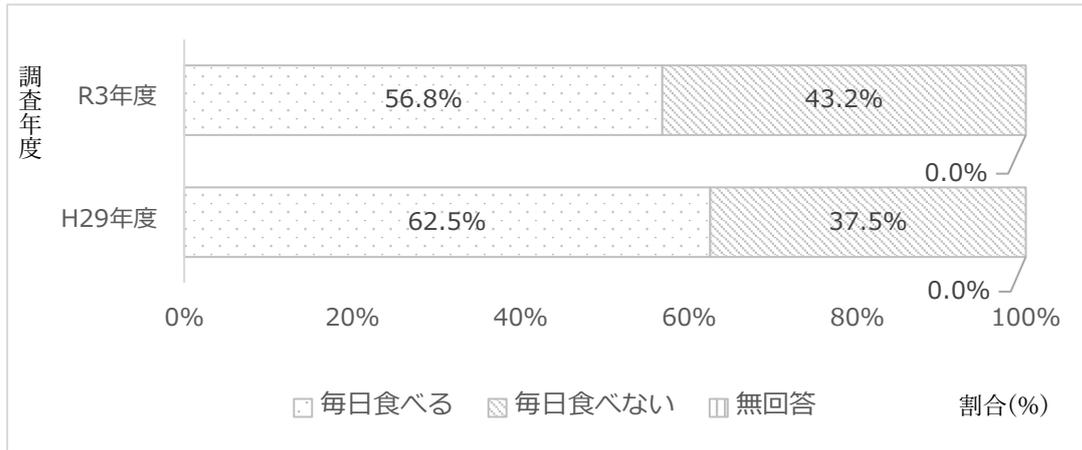


図 34 30代・男性の朝食摂取に関するクロス集計結果（平成29年度 n=80、令和3年度 n=74）

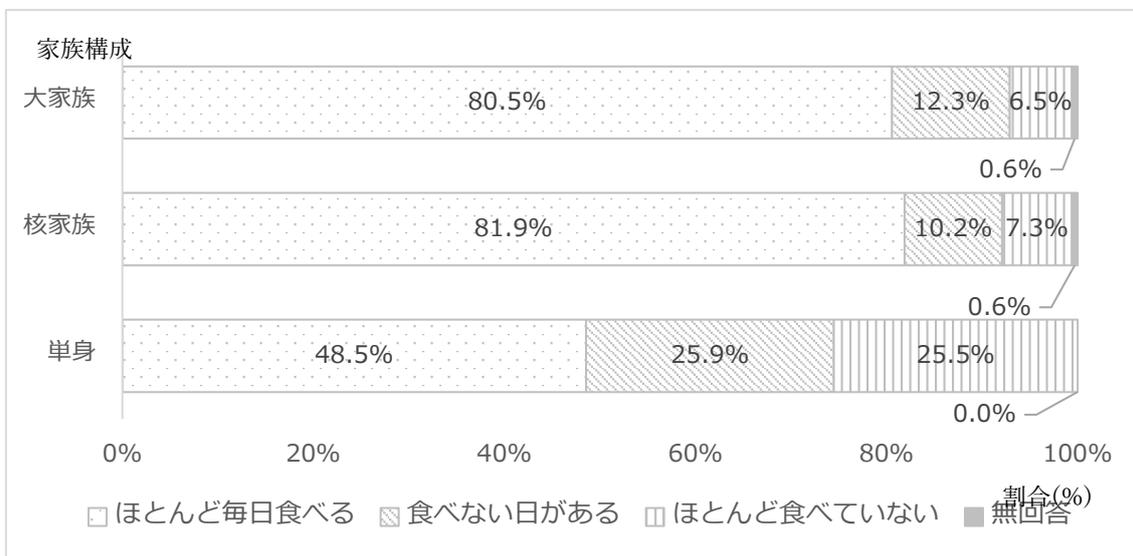


図 35 家族構成と朝食摂取のクロス集計結果（大家族 n=154、核家族 n=1018、単身 n=274）

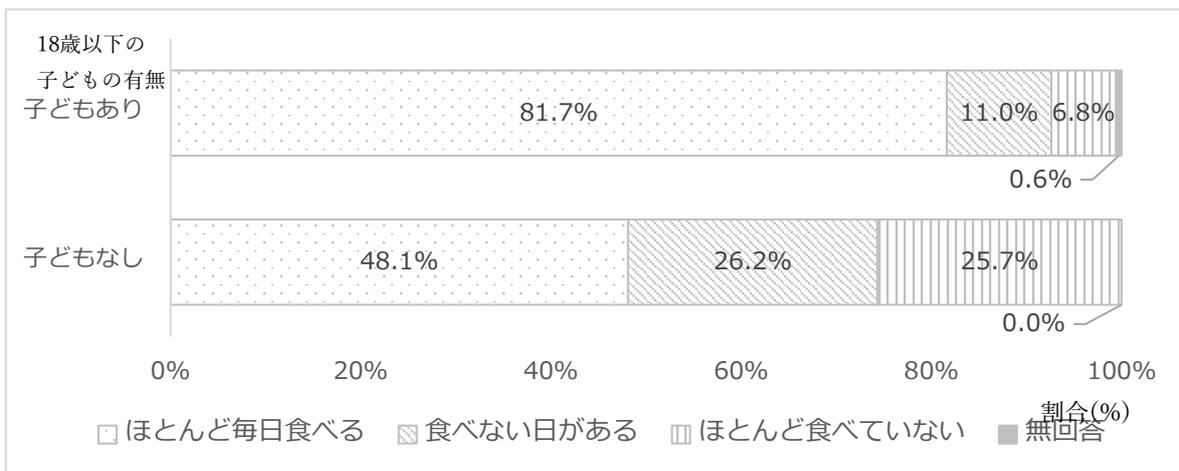


図 36 朝食を食べる頻度割合（子どもの有無）
（子どもあり n=545、子どもなし n=397、分析対象は20・30・40歳代のみ）

朝食の分類

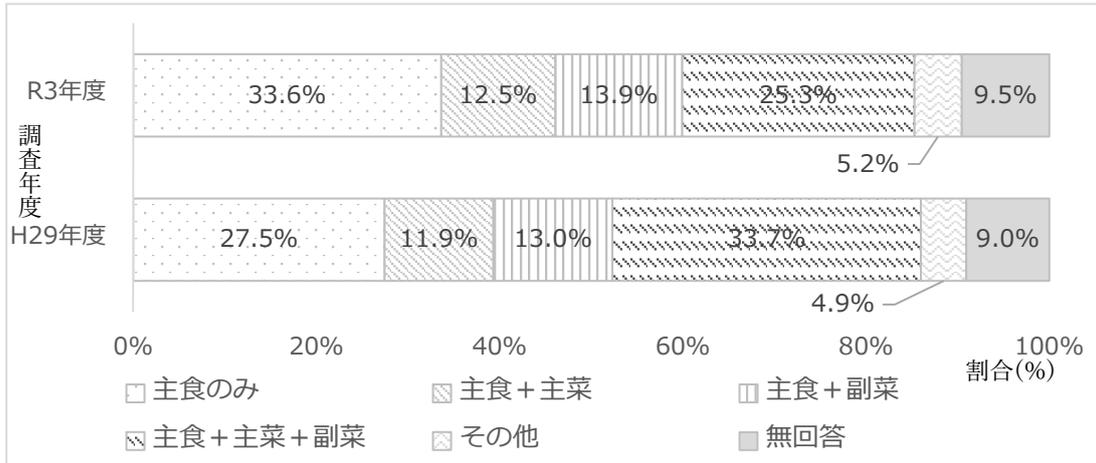


図 37 朝食の分類 (R3 n=1508, H29 n=1315)

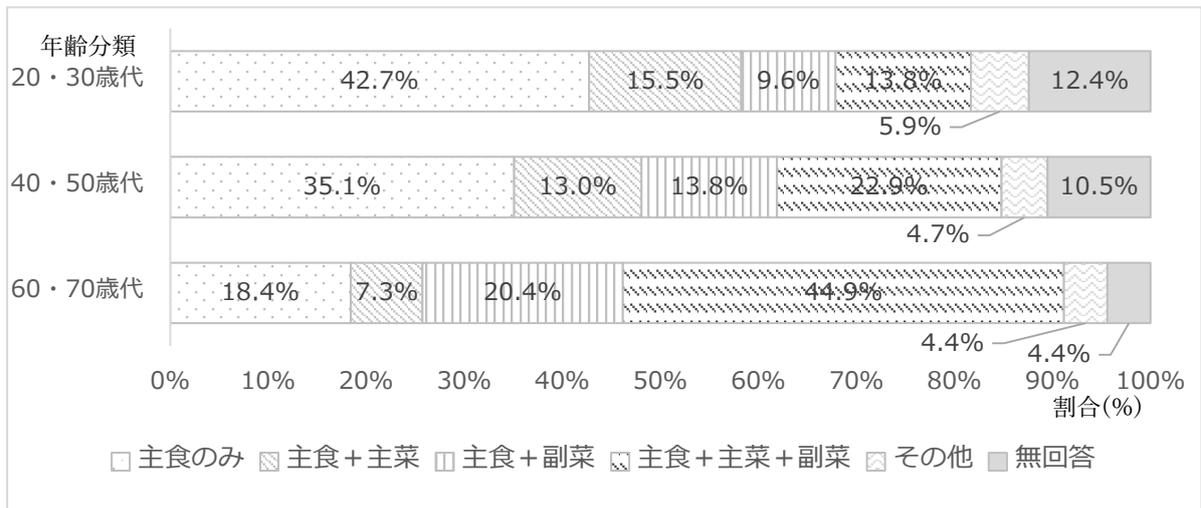


図 38 朝食の分類 (年代別) (20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

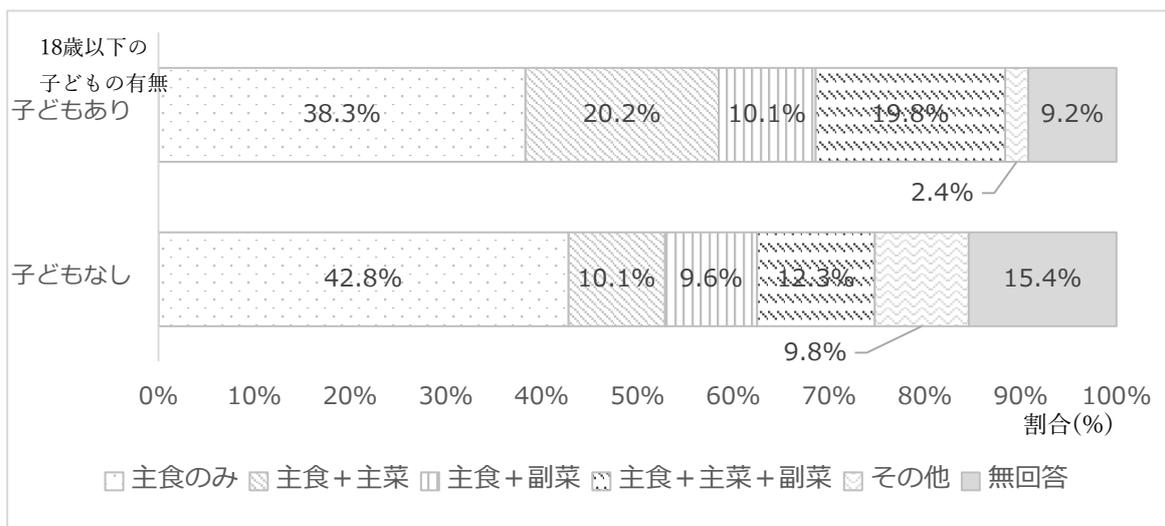


図 39 朝食の分類 (子どもの有無)

(子どもあり n=545、子どもなし n=397、分析対象は20・30・40歳代のみ)

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、朝食摂取頻度に有意差はなかったが、年代別で比較すると、朝食を「毎日食べる」割合が、20・30歳代62.7%、40・50歳代は80.1%、60歳70歳代は90.4%と若い世代ほど低かった。(図32) 前回調査結果から数値目標としている20代、30代男性は、基礎調査と比較して、20代は44.8%から37.2%(図33)、30代男性は、62.5%から56.8%に減少した。(図34)

家族構成で比較すると、大家族は80.5%、核家族は81.9%、単身者は48.5%(図35)、18歳以下の子どもの有無で比較すると、子どもありは81.7%、子どもなしは48.1%だった。(図36)

また、基礎調査と比較して、「主食・主菜・副菜のそろった朝食を摂取する」割合は33.7%から25.3%に減少した。(図37) 年代別で比較すると、20・30歳代13.8%、45・50歳代は22.9%、60歳70歳代は44.9%だった。(図38) 18歳以下の子どもの有無で比較すると、子どもありは19.8%、子どもなしは12.3%だった。(図39)

<対策>

「毎日食べる」割合、「主食・主菜・副菜のそろった朝食を摂取する」割合が、若い世代、単身者が低かったことから、若い世代の単身者、例えば大学生などにターゲットをおいた朝食摂取に向けた取組を強化する必要があると考える。

【野菜摂取】について

普段の食生活で、1日に野菜料理（海藻類・いも・きのこ類を含む）を毎回（食）食べますか？
（成人）

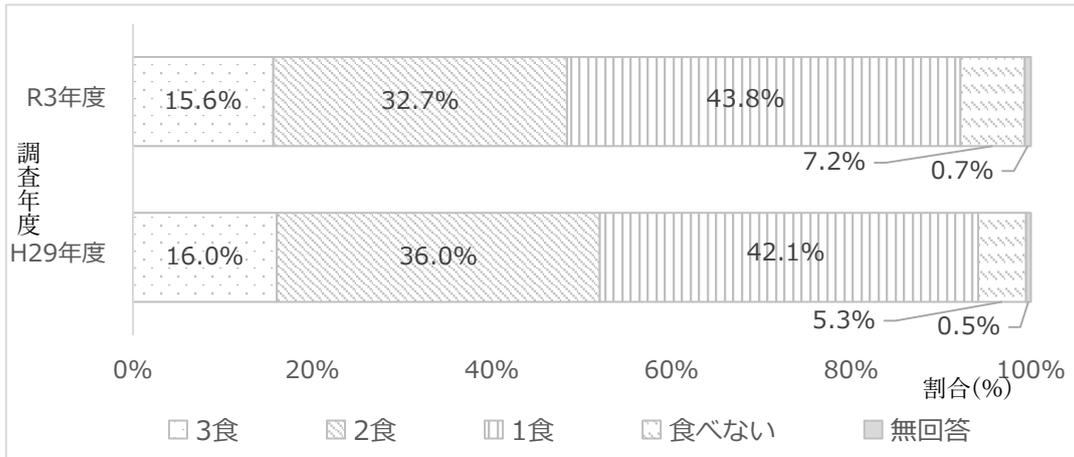


図40 1日に野菜料理を食べる頻度 (R3 n=1508, H29 n=1315)

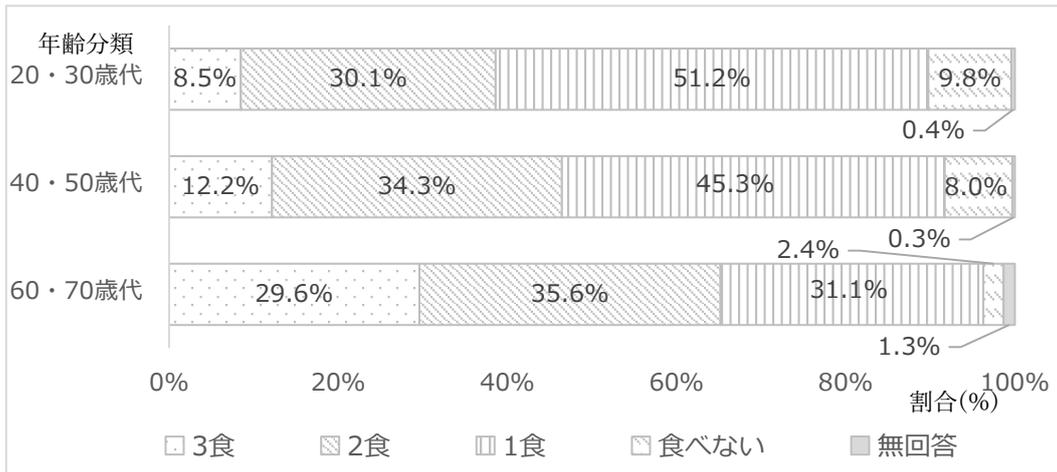


図41 1日に野菜料理を食べる頻度（年代別）

(20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

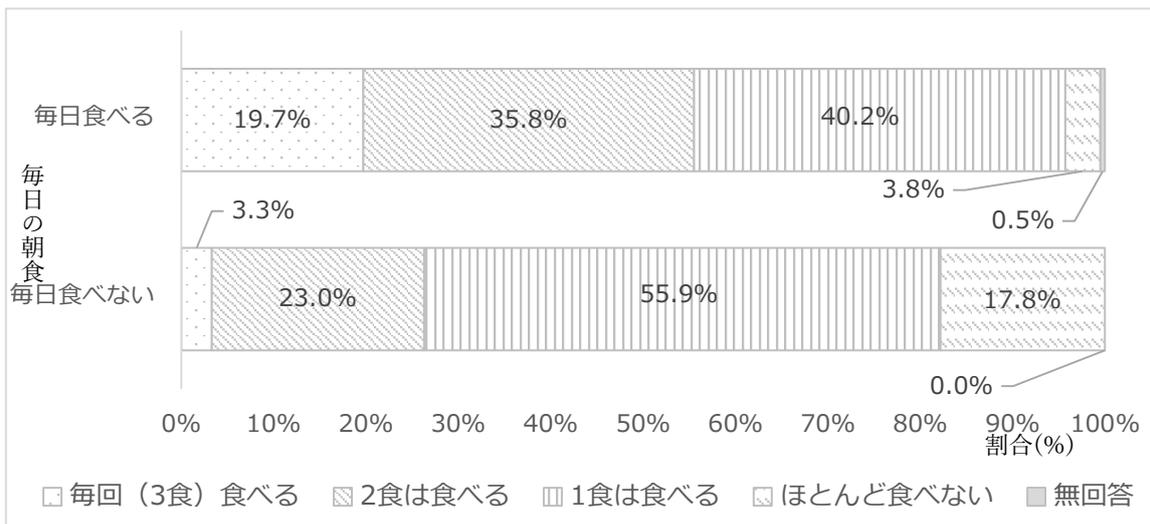


図42 朝食摂取と野菜摂取のクロス集計結果（朝食を毎日食べる n=1134、毎日食べない n=365）

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、有意差はなかったが、年代別で比較すると、「3食（毎食）食べている」割合は、20・30歳代は8.5%、40・50歳代は12.2%、60・70歳代は29.6%と若い世代ほど低かった。（図41）また、朝食摂取と野菜摂取頻度の関係を見た結果、野菜料理を「1食食べる」、「ほとんど食べない」人の割合は、朝食を毎日食べる人の44.0%に比べ、朝食を毎日食べない人は、73.7%と多かった。（図42）

<対策>

野菜摂取量を増やすことで疾病を予防するために、野菜摂取の重要性だけでなく、朝食を毎日食べること、朝食において主食・主菜・副菜をそろえることの重要性も併せて伝えることが必要と考える。

【食事バランス】について

主食（ごはん、パン、麺など）・主菜（肉・魚・卵・大豆製品などを使った料理）・副菜（野菜・きのこ・いも・海藻などを使った料理）の3つを組み合わせた食事を1日に2回以上ある日が、週に何日ありますか？（成人）

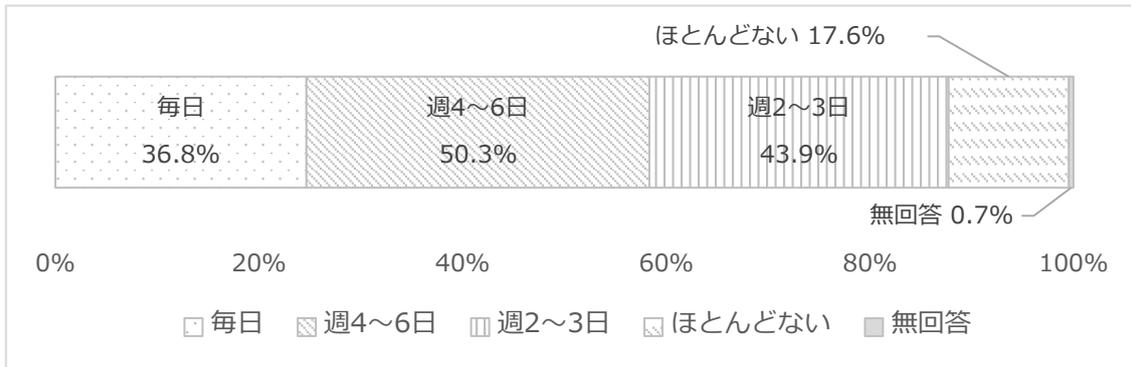


図 43 主食・主菜・副菜を組み合わせた食事の頻度 (n=1508)

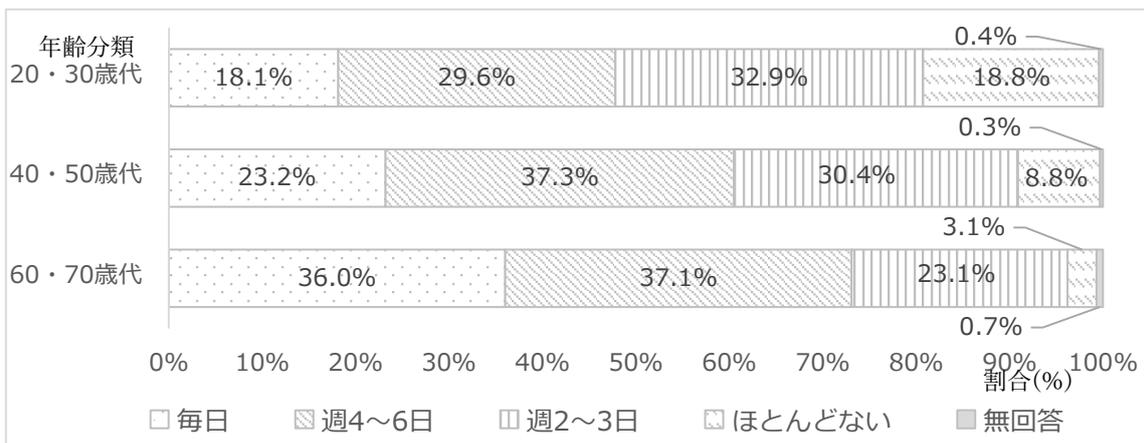


図 44 主食・主菜・副菜を組み合わせた食事の頻度（年代別）
 (20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450)

<結果のまとめ>

基礎調査では把握していないが、「主食・主菜・副菜の3つを組み合わせた食事を1日に2回以上ある日が毎日ある」割合を年代別で比較すると、20・30歳代は18.1%、40・50歳代は23.2%、60・70歳代は36.0%と若い世代ほど低かった。(図44)

<対策>

若い世代ほど課題が多いことから、主食・主菜・副菜の3つを組み合わせた食事を具体的にイメージできていないことが考えられる。ワンプレートの食事であっても、手軽に、主食・主菜・副菜を組み合わせることができるなど、そのポイントや知識を伝える必要があると考える。

【減塩】について

外食・中食（惣菜・弁当など）をどのくらい利用しますか？（成人）

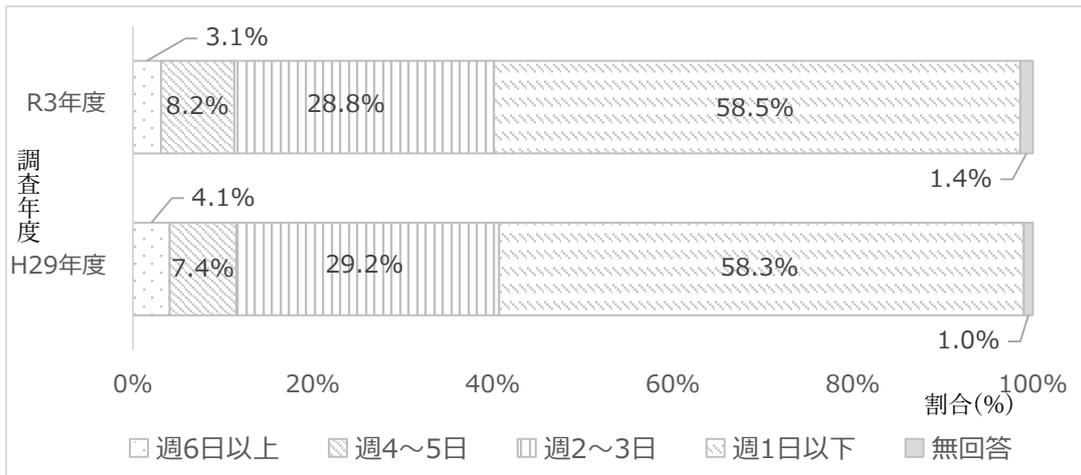


図45 外食の利用頻度（R3 n=1508, H29 n=1315）

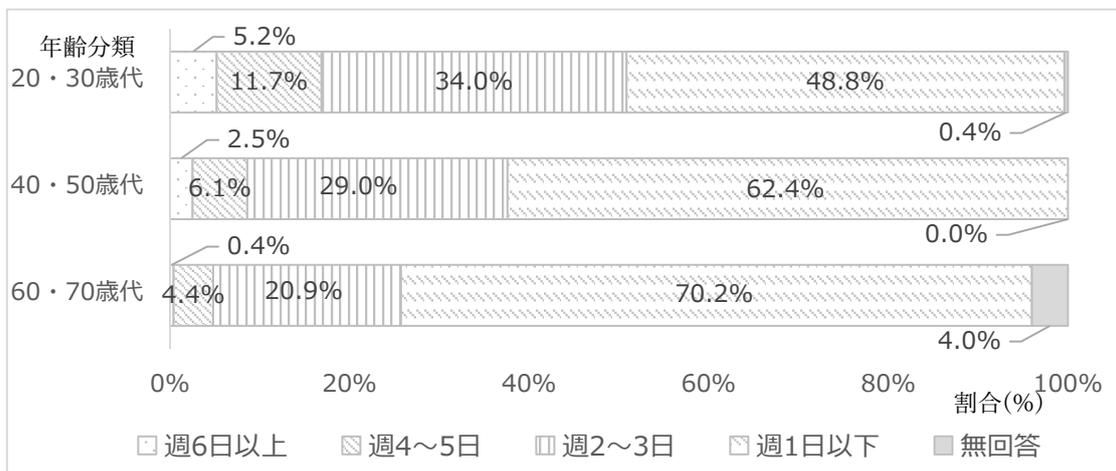


図46 外食の利用頻度（年代別）（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

外食（レストラン、ハンバーガーショップなど）をどのくらい利用しますか？（子ども）

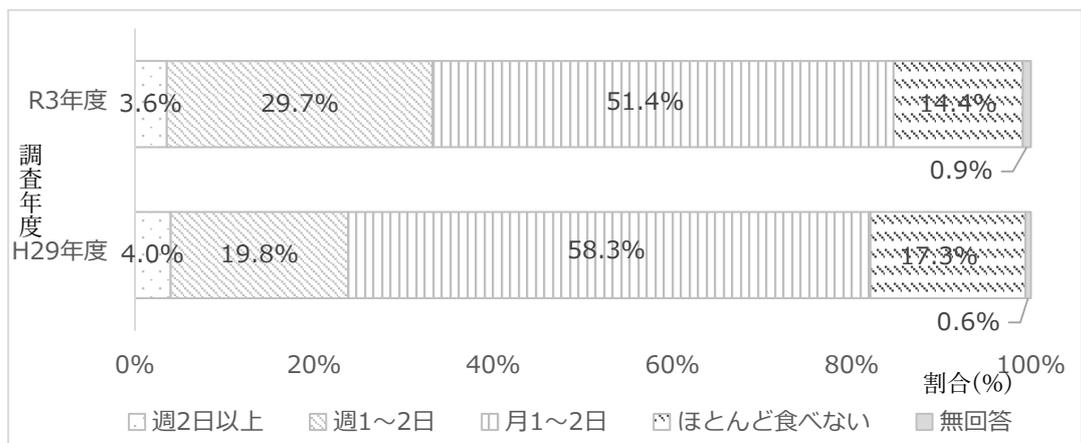


図47 外食の利用頻度（小学校+中学校）（R3 n=1011, H29 n=1000）

麺類の汁はどうしていますか？（成人）

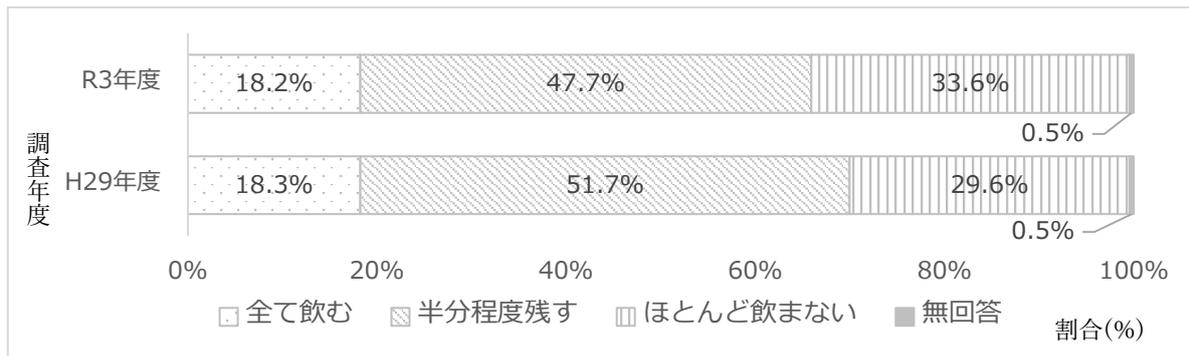


図48 麺の汁 (R3 n=1508, H29 n=1315)

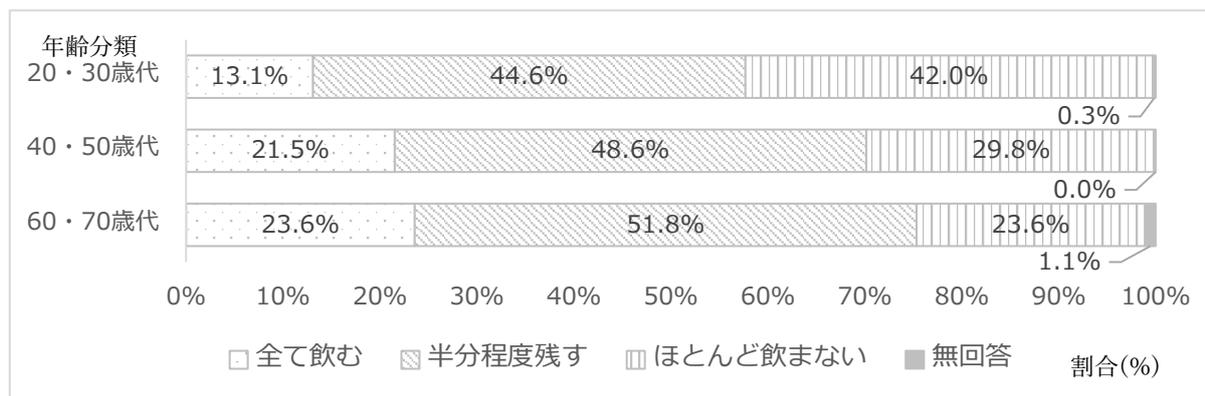


図49 麺類の汁（年代別）（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、成人は、「外食・中食の利用頻度」の割合に有意差はなかったが、年代別で比較すると、「週6日以上、週4～5日、週2～3日」と答えた割合を合計すると、20・30歳代は50.9%、40・50歳代は37.6%、60・70歳代は25.7%と若い世代ほど高かった。（図46）

子どもの「外食の利用頻度」の割合は、週2日以上が4.0%から3.6%、週1～2日が19.8%から29.7%、月1～2日が58.3%から51.4%、ほとんど食べないが17.3%から14.4%であった。（図47）

また、成人の「麺の汁を残すか」との問いについて、有意差はなかったが、年代別で比較すると、「全て飲む」の割合は、20・30歳代は13.1%、40・50歳代は21.5%、60・70歳代は23.6%だった。さらに、「半分残す」の割合は、20・30歳代は44.6%、40・50歳代は48.6%、60・70歳代は51.8%だった。（図49）

<対策>

成人は、「外食・中食の利用頻度」の割合は、若い世代ほど高く、子どもの「外食の利用頻度」の割合は、前回と比較して高くなる傾向にあった。外食の利用が身近になる環境にあると考え、外食の特徴や上手な活用方法について特に課題となる若い世代にターゲットをしばって情報提供する必要があると考える。

また、全ての世代に、麺類の汁を残すことなど減塩についての正しい知識を効果的に提供する必要があると考える。

【マナー】について

食事の時に「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをしますか？（子ども）

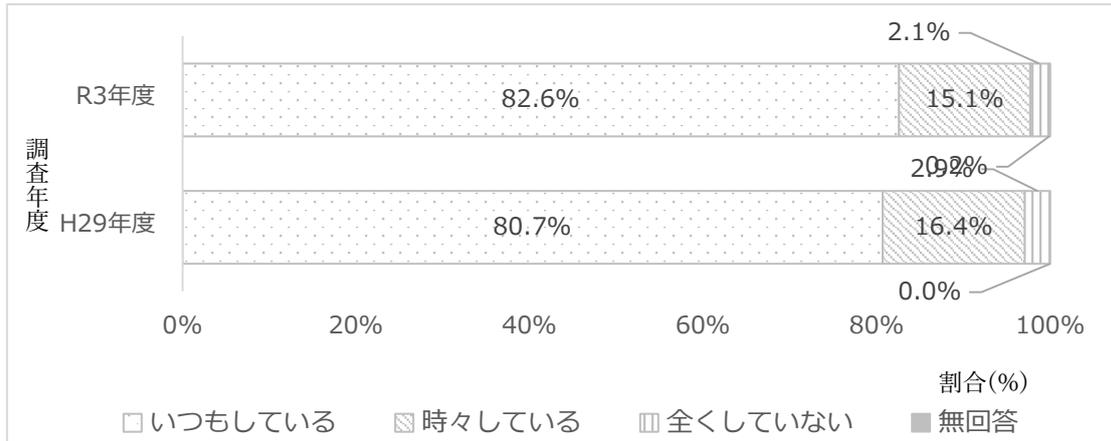


図 50 食事の時に「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする頻度（小学校+中学校）（R3 n=1011, H29 n=1000）

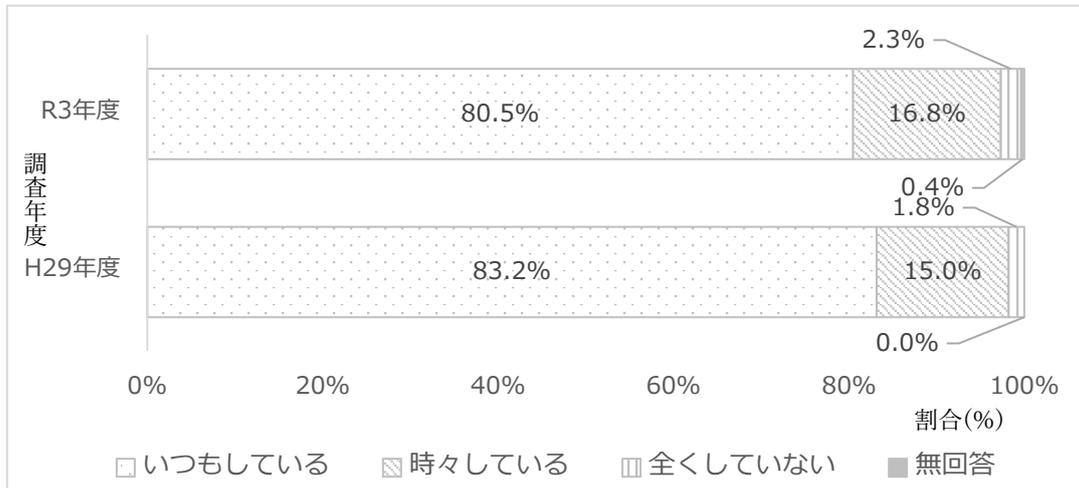


図 51 食事の時に「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする頻度（小学校）（R3 n=517, H29 n=499）

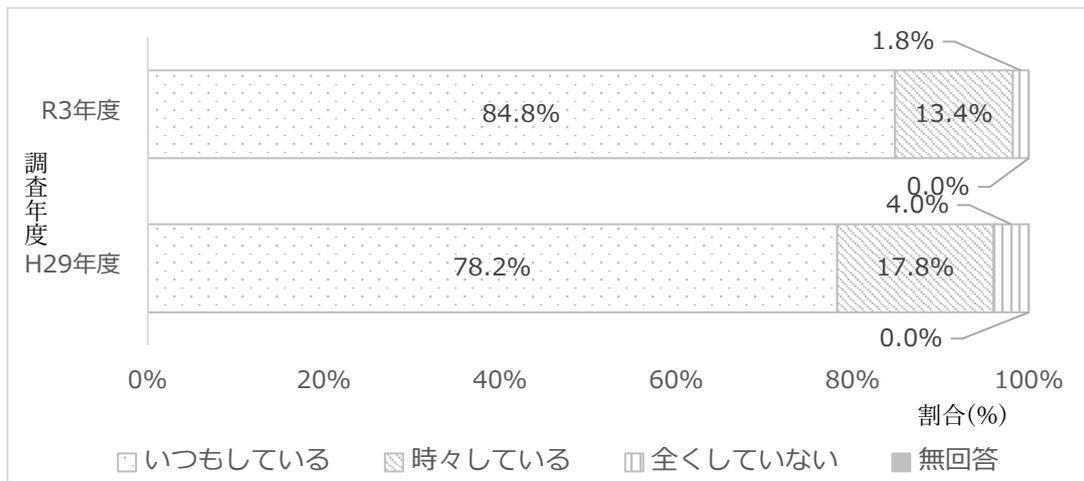


図 52 食事の時に「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする頻度（中学校）（R3 n=494, H29 n=501）

食事の時など、子どもたちに食べ方や食事のマナーを伝えていますか？（成人）

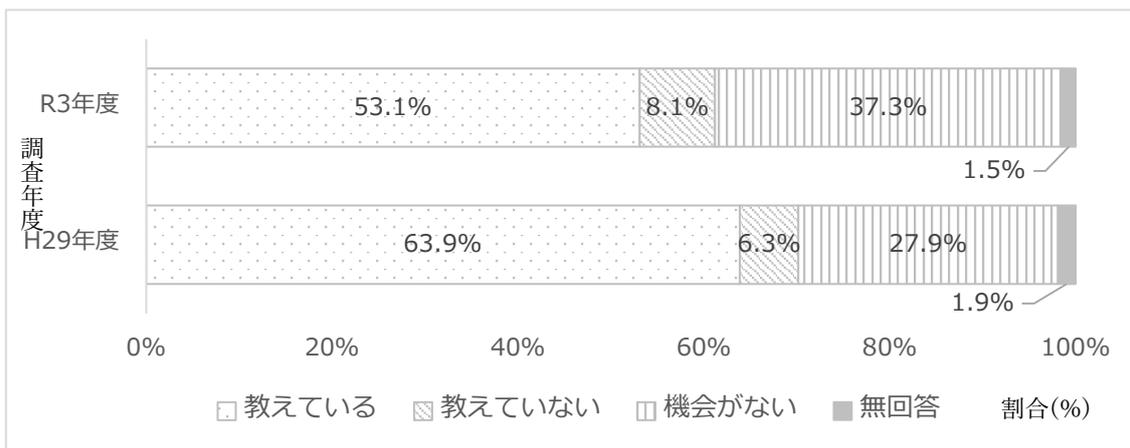


図 53 子どもに食べ方や食事のマナーを伝えているか（R3 n=1508, H29 n=1315）

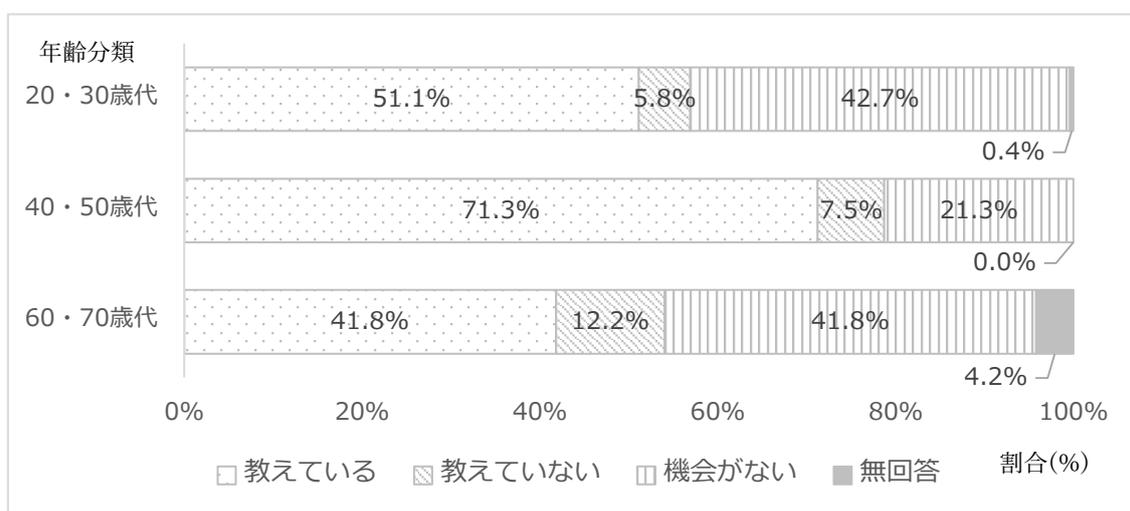


図 54 子どもに食べ方や食事のマナーを伝えているか（年代別）
（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

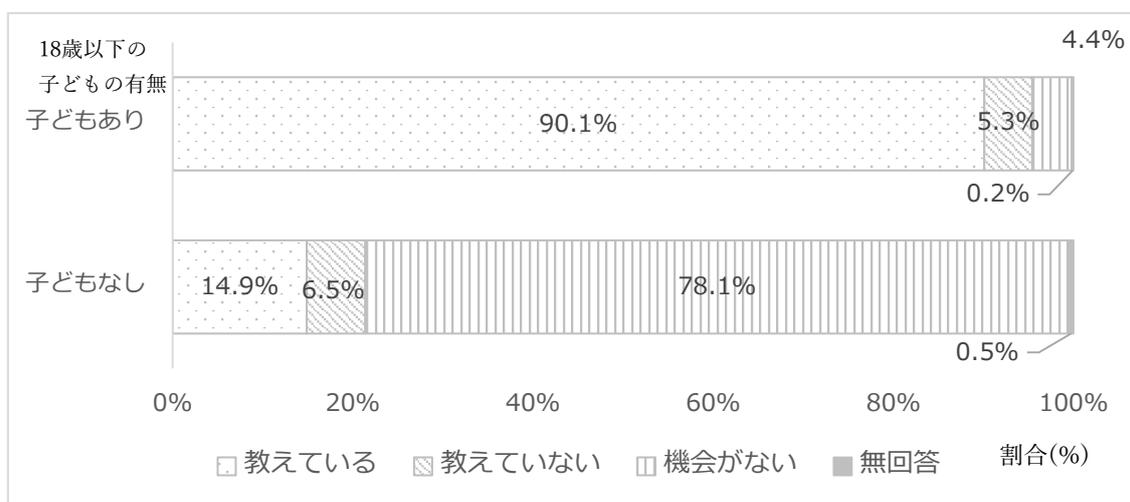


図 55 子どもに食べ方や食事のマナーを伝えているか（子どもの有無）
（子どもあり n=545、子どもなし n=397、分析対象は20・30・40歳代のみ）

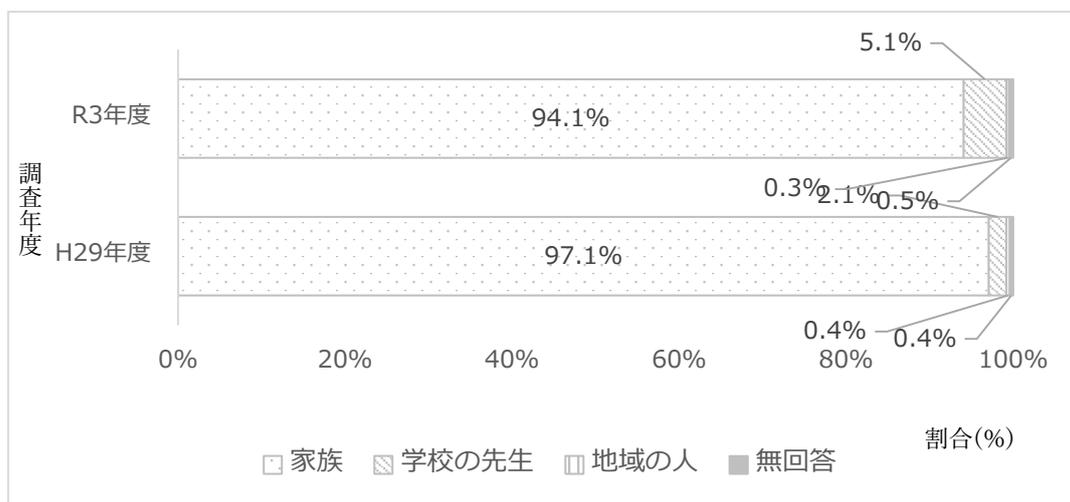


図 56 食事の時のお行儀(ぎょうぎ) (マナー) は誰(だれ)に教えてもらいますか?
(小学校+中学校) (R3 n=1011, H29 n=1000)

<結果のまとめ>

食事のあいさつについて、基礎調査と比較して、小学生の「食事のあいさつをいつもする」割合に有意差はなかったが、中学生は、有意差がみられ、78.2%から84.8%に増加した。(図 52)

食事のマナーを教える機会について、基礎調査と比較して、「教えている」割合は、63.9%から53.1%と減少した。(図 53) 年代別で比較すると、20・30 歳代は51.1%、40・50 歳代は71.3%、60・70 歳代は41.8%だった。(図 54) また、子どもの有無で比較すると、子どもありが、90.1%、子どもなしが14.9%だった。(図 55)

子どもの「食事のマナーをだれから教えてもらうか」の回答では、基礎調査と比較して、家族が97.1%から94.1%に減少し、学校の先生が2.1%から5.1%に増加した。(図 56)

<対策>

食事のマナーについては、子どもは、ほとんど家庭でマナーを教えてもらっている一方で、学校の先生と答えた割合が増加していることから、家庭だけでなく家庭以外での地域などでのサポートも同時に行うことができる環境も必要と考える。子どもがいない人は、食を通じた交流の機会を増やすことも大切と考える。

【食べ残し】について

食事を残さないようにしていますか？（成人）

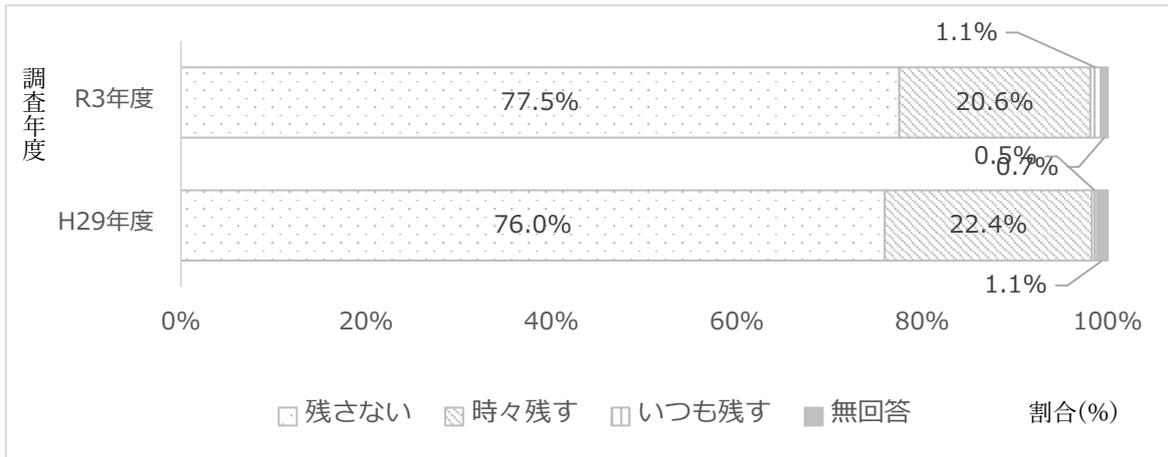


図 57 食事を残さないようにしているか
(R3 n=1508, H29 n=1315)

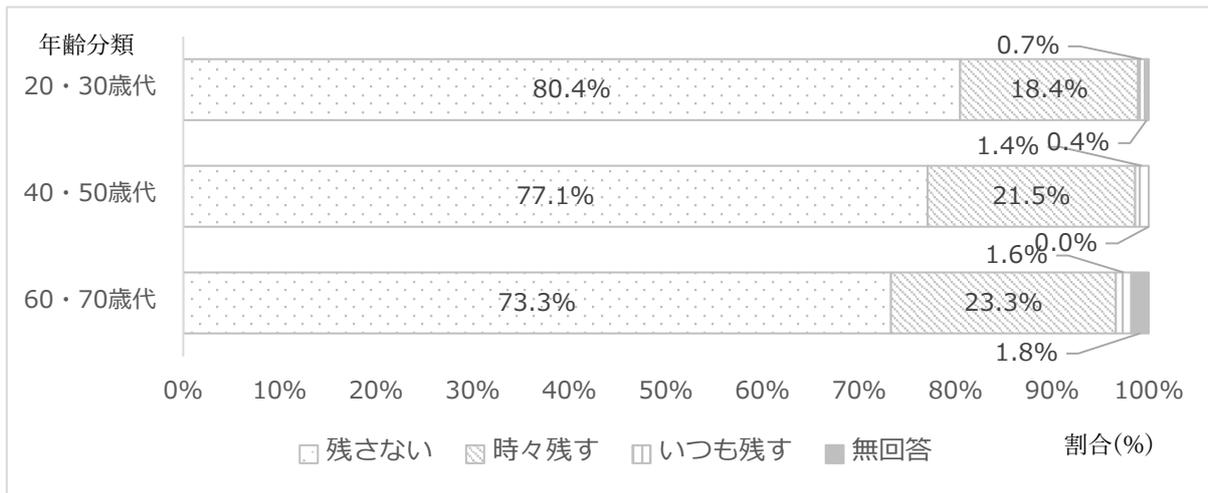


図 58 食事を残さないようにしているか（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

食事を残さないようにしていますか？（子ども）

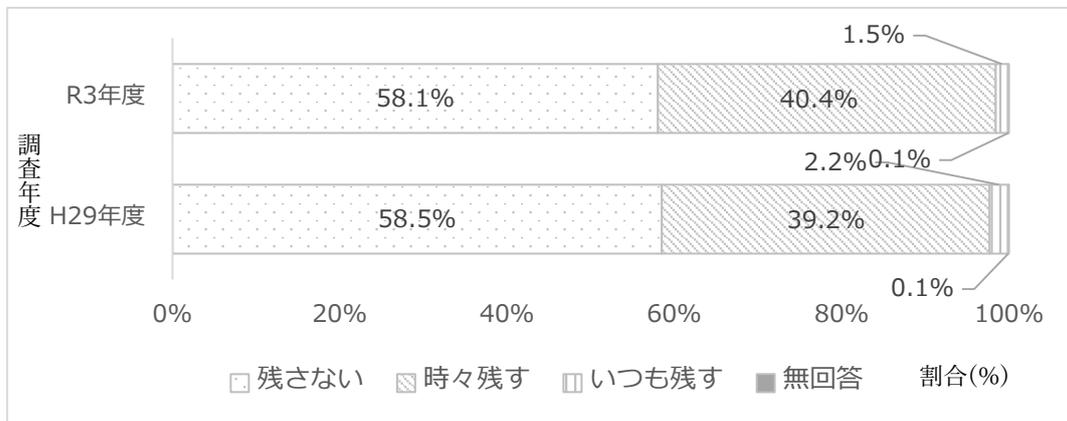


図 59 食事を残さないようにしていますか？（小学校+中学校）（R3 n=1011, H29 n=1000）

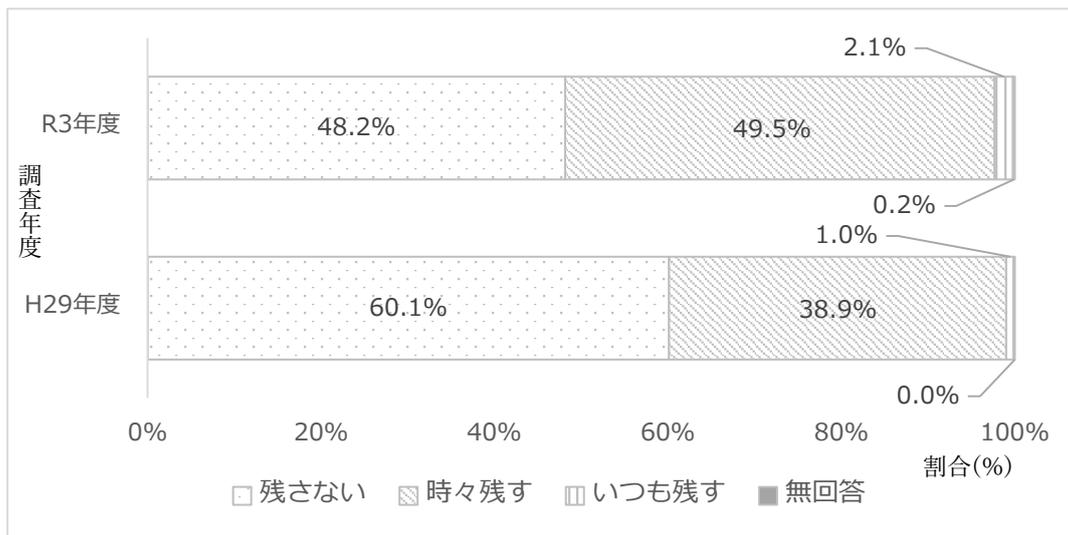


図 60 食事を残さないようにしていますか？（小学校）（R3 n=517, H29 n=499）

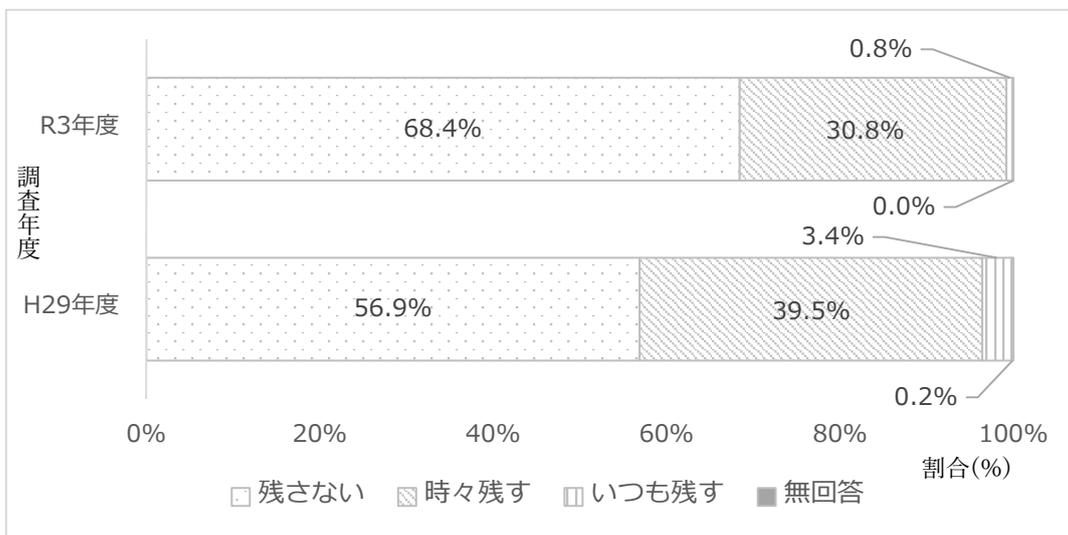


図 61 食事を残さないようにしていますか？（中学校）（R3 n=494, H29 n=501）

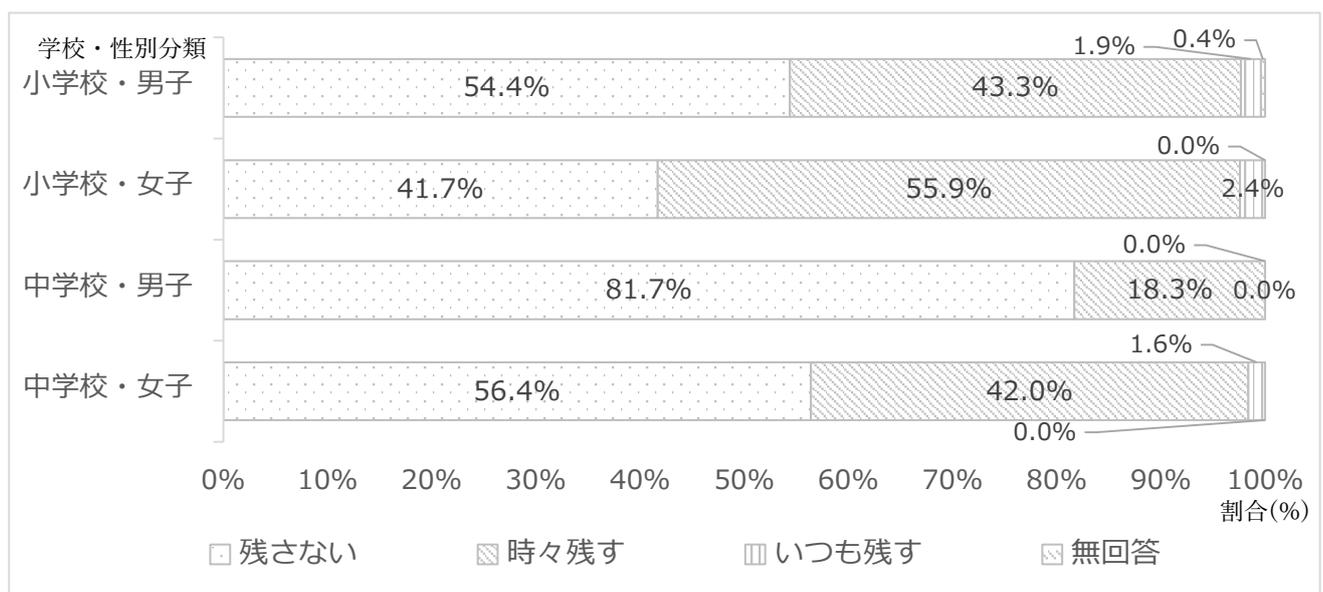


図 62 小中・性別の4分類における食事を残さない（問7）のクロス集計結果
（小学校・男子 n=261、小学校・女子 n=254、男性 n=235、女性 n=257）

生ごみを減らす工夫（食材を買い過ぎない、食事を作り過ぎない、生ごみを堆肥化するなど）をしていますか？（成人）

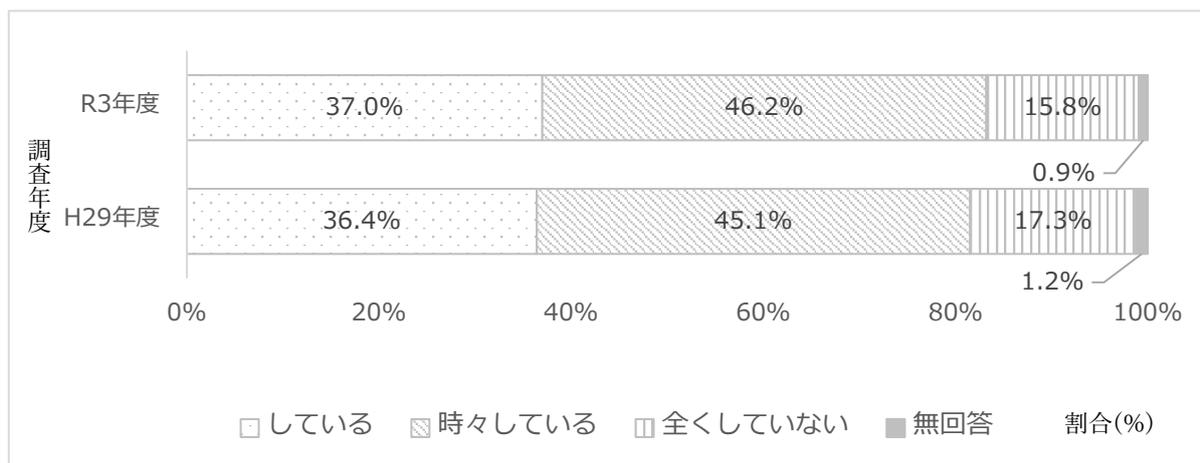


図 63 生ごみを減らす工夫をしているか（R3 n=1508、H29 n=1315）

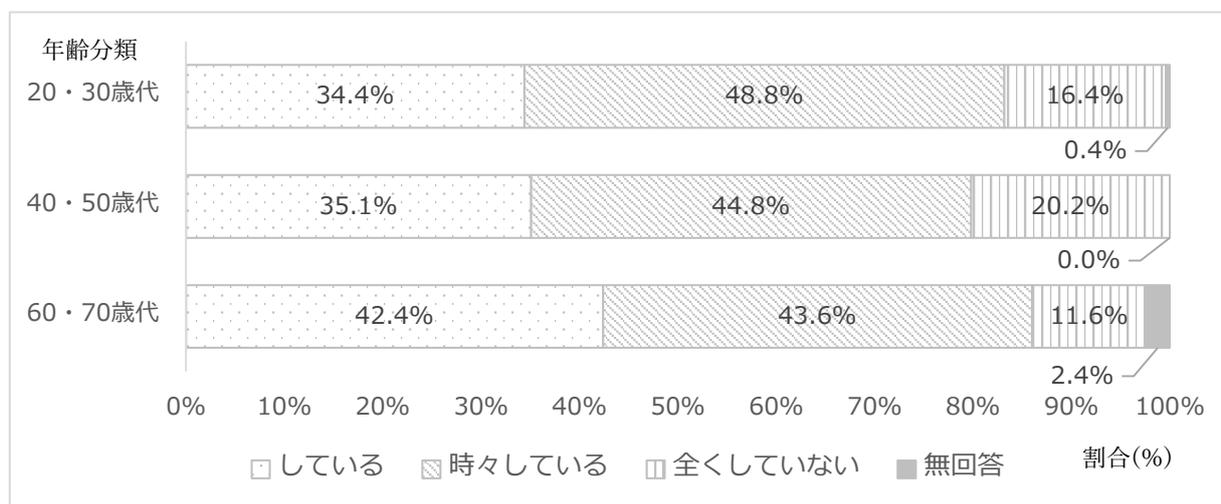


図 64 生ごみを減らす工夫をしているか（年代別）
（20・30歳代 n=695、40・50歳代 n=362、60・70歳代 n=450）

<結果のまとめ>

基礎調査と比較して、成人、「食べ残し」の割合に有意差はなかったが、年代別で比較すると、「食べ残さない」割合は、20・30歳代は80.4%、40・50歳代は77.1%、60・70歳代は73.3%だった。（図58）

小学生は、「食べ残さない」割合が、60.1%から48.2%に減少（図60）、中学生は、56.9%から68.4%に増加した。（図61）また、子どもを性別で比較すると、小学生の男子は54.4%、女子は41.7%、中学生の男子は81.7%、女子は56.4%と女子の方が、「食べ残さない」割合が少なかった。（図62）

また、「生ごみを減らす工夫をしている」割合に有意差はなかったが、「全くしていない」割合が15.8%だった。（図63）年代別で比較すると、「全くしていない」割合は、20・30歳代は16.4%、40・50歳代は20.2%、60・70歳代は11.6%だった。（図64）

<対策>

小学生は、食べ残すことの抵抗感が減ったことも考えられる。子どもを性別で比較すると、女子の方が、「食べ残さない」割合が少なかったため、特に、女子児童・生徒が「やせ」について過剰な意識をもたないよう正しい知識を提供する必要もあることから、学校等と情報共有し、連携して効果的に情報提供する必要があると考える。

また、他世代と比較して、60・70歳代は、「残さない」割合が少なかったが、1食の食事の目安量を十分認識していない可能性も考えられる。1回の食事の目安量を情報提供するなど、低栄養に関する意識や予防策について情報発信する必要があると考える。

さらに、生ごみを減らす工夫について、基礎調査と比較して有意差はなかったが、「全くしていない」割合が15.8%いること、食べ残すことは、食事の摂取量とも関係があることから、様々な世代に「食品ロス」について関心をもってもらえるよう食育の啓発の機会に併せて伝える必要があると考える。

《第2次山陽小野田市食育推進計画中間評価結果》

目標指標		H29年度	R3年度	中間評価	目標値
1	食育に関心をもっている市民の割合	大人57.9%	大人48.9%	▲	増やす
2	ほとんど毎日家族と一緒に食事をしている子どもの割合	子ども81.6%	子ども83.6%	○	増やす
	誰かと食事をする機会のない高齢者の割合	高齢者20.2%	高齢者23.7%	▲	減らす
3	地域にいるさまざまな人が集える共食の場に参加したい市民の割合	大人62.0%	大人51.8%	▲	増やす
4	朝食を欠食する市民の割合	20代男性55.2% 30代男性37.5%	20代男性62.8% 30代男性43.2%	▲	減らす
5	毎日朝食を食べる園児・児童生徒の割合	幼稚園児92.0% 保育園児91.5% 小学生87.9% 中学生84.9%	幼稚園児95.6% 保育園児92.2% 小学生87.6% 中学生85.4%	○	増やす
6	学校給食における地場産物を使用する割合	県内産80.3% 市内産11.7%	県内産76.3% 市内産6.6%	▲	増やす
7	主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を1日2回以上ほぼ毎日食べている市民の割合	—	大人36.8%	—	増やす
8	毎食野菜料理を食べる市民の割合	子ども21.7% 大人16.0%	子ども23.4% 大人15.6%	子ども○ 大人▲	増やす
9	塩分控えめにいつも心がけている市民の割合	大人33.0%	—	—	増やす
10	成人肥満者（BMI25.0以上）の割合 男性（20歳以上）女性（40歳以上）	男性28.6% 女性17.5%	—	—	減らす
11	ゆっくり噛んで食べるよういつも心がけている市民の割合	子ども— 大人17.4%	子ども26.8% 大人17.6%	子ども— 大人○	増やす
12	農林漁業体験を経験した市民の割合	—	子ども78.6% 大人64.0%	—	増やす
13	食育の推進に関わるボランティア団体等において活動している市民の数	—	180人	—	増やす
	ねたろう食育博士認定者数	537人	634人	○	937人
14	食事を残さず食べる市民の割合	子ども58.5% 大人76.0%	子ども58.1% 大人77.5%	子ども▲ 大人○	増やす
15	生ごみを減らす工夫をしている市民の割合	大人81.5%	大人83.2%	○	増やす
16	「やまぐち食べきり協力店」の登録店舗数	8件	11件	○	増やす
17	食事の時など、子どもたちに食べ方や食事のマナーを教えている市民の割合（若い世代）	大人63.9% 20代35.4% 30代80.6%	大人53.1% 20代23.7% 30代81.0%	▲	増やす
18	地元につながる料理を家庭でも食べる市民の割合	子ども39.0% 大人57.0%	子ども33.3% 大人52.6%	子ども▲ 大人▲	増やす

○改善 ▲悪化

